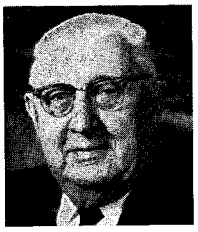
聖徒の道 1971 7

心の糧



十二使徒評議員会補助
アルマ・ソネ

19世紀の初頭，ジョセフ・スミスがこの世に現われた。そして，キリスト教と呼ばれている教会が律法を破り，とこしえの福音を犯していると公言した。これは予言の成就であった。末日聖徒は回復された福音を教えるという義務を負っている。私は心からこう述べることができる。回復された教会はこの大いなる責任を果たしつつある。教会が組織されて一年も経ないうちに，宣教師が財布も袋も持たず伝道におもむき，回復された神の真理を伝えた。彼らの業は成功した。教会は宗教史に例を見ない宣教師制度を通して，発展し，繁栄を見た。

宣教師は諸外国におもむいた。反対の手が高まり，ある時は暴徒が結集した。新聞は激しい攻撃演説を掲載し，多くの迫害に見まわれた。数々の教会でさえ敵対した。だが，神の命令によって組織された若い教会は，成長し繁栄し，ついには予言者ジョセフ・スミスが予言したようにロッキー山間にたどりついた。

兄弟姉妹，この業は進みつつある。そして全地に満ちるまで進み行くであろう。いかなるものもこの前進を留めることはできない。

——もくじ——

開拓者精神……ジョセフ・フィールディング・スミス大管長… 181
予言者が受継いでいたもの……リチャード・ロイド・アンダーソン博士… 183
予言者ジョセフ・スミスの人間性……レオナード・J・アリントン博士… 187
相互依存：家庭と教会の目ざすもの……ウィリアム・G・ダイヤー博士… 191
ジョセフ・フィールディング・スミス大管長……エディス・S・パトリック… 195
海の嵐……アイリス・シンダーガード… 196
若き日のジョセフ・スミス…… 199
神との歩み……カーラ・サンソン… 202
テリオテマナとプナ……ドン・マーシャル，ジェーン・マーシャル… 207
忘れられない誕生日…… 209

今月のこよみ

24日　開拓者記念日

伝道部ステーキ部所在地

日本東伝道部
札幌市南4条西1丁目大浦ビル2階
TEL（011 521 6162）
〒 060

日本伝道部
東京都港区南麻布5—8—10
TEL（03—442—7438）
〒 106

東京ステーキ部
東京都港区北青山3—6—4
TEL（03—407—2465）
〒 107

日本中央伝道部
神戸市灘区篠原本町4—6—28
TEL（078—88—2712）
〒 657

日本西部伝道部
福岡市浄水町46
TEL（092—52—6048）
〒 810

表紙の説明

予言者ジョセフ・スミスの父方の祖父であるエイジェル・スミスは妻と子供に対して驚くべき手紙を書いている。1799年の場面を再現した表紙はエルドン・リンショトンによる写真である。詳細はP183以下，リチャード・L・アンダーソンの「予言者の受継いでいたもの」に記されている。

開拓者精神

ジョセフ・フィールディング・
スミス大管長

あなたが他の時代に生を受けていたとしたら，どうなっていただろうかと考えたことがあるだろうか。あなたはどんなすばらしいことをなし遂げていただろうか。他の時代も確かに重要であったが，私たちにとって最も大切なのは今日，この時代である。私たちが今なしていなければならないことは，義のうちに物事をなし遂げることである。

7月は開拓者に敬意を表する月である。開拓者は大いなることをなし遂げた。教会員である私たちは，いずこに住んでいようとも開拓者の残した礎に増し加えるように力を尽さねばならない。

肥沃なユタ山間地方を通ったある旅行者は耕された野と花咲く園を見て，こう言った。「ブリガム・ヤングがこの水の豊かな美しい谷を永住の地に選んだのは，あたりまえのこ

とですね。」

ちょうど春を迎え，野には夏に収穫を得る作物の緑があり，果物の木は満開に花を咲かせ，この肥沃な地のいたる所に，豊かな実りを思わせる風景があった。ユタを急いで通り抜け，今日の状態を見る人々から，あの旅行者のような言葉がよく聞かれる。何人の人が州の初期の歴史，開拓者が「荒野と，かわいた地とは楽しみ，さばくは喜びて花咲き，さふらんのように」（イザヤ35:1）するために超人的な戦いに打ち勝ったことを知っているだろうか。

1847年7月24日，グレートソルトレーク峡谷に到着した少数ながらも強固な決意を秘めた開拓者の前にひろがっていたのは，及びもつかない光景であった。土壌は固く，ひからびていた。植物といえば，谷中に生えていた海辺に生じる雑草，かん木，セージ，それに渓流の河岸にわずかの柳とポプラだけであった。荒廃し気落ちさせるような光景であった。開拓者たちは耕そうとした。だが非常に長い間征服されなかった土地は作物を拒んだ。だが峡谷の渓流を利用し土壌に水を完全にしみ込ませることにより土壌を変え，旅の間携えて来た貴重な種を蒔ける状態にすることができた。このようにして不利な状況のもとに不屈の戦い，砂漠を征服する戦いが始まったのである。そして，これは灌がいによる近代農耕方式の先駆けでもあった。

当時開拓者は文明の地域から千マイル以上も離れ，孤立していたため，指導者は消費財をすべて生産し，質素にして倹約するよう教えた。これは今もなおすぐれた勧告である。家内産業の確立は多くの説教のテーマになっていた。自然から生活に必要なものを生み出し，浪費を避け，「家庭消費財を家庭で生産する」というブリガム・ヤング大管長の勧告のもとに聖徒たちは，羊毛工場，皮なめし工場，鉄工場，製材所，製粉所，陶磁器工場など多くの有益な産業を確立した。人々は必需品の製造方法を学び，消費する食料を栽培した。開拓者の衣服は簡素であったが，丈夫であり，自らの手で作ったものを恥しいとは思わなかった。

今日の世界は一致の精神と社会の安寧のための個人への関心が失われる傾向にあり，隣人に対して愛を示す精神が損われつつある。他人より抜きん出ようという気持が高まり，それに相応して，社会的な関心や隣人愛が失われている。一致のない所，人々が考える目的，望みにおいて一つになっていない所，万人のために自己を捨てて働くことを拒否する所，金銭愛，この世的な事に執着している所に，協力はあり得ない。

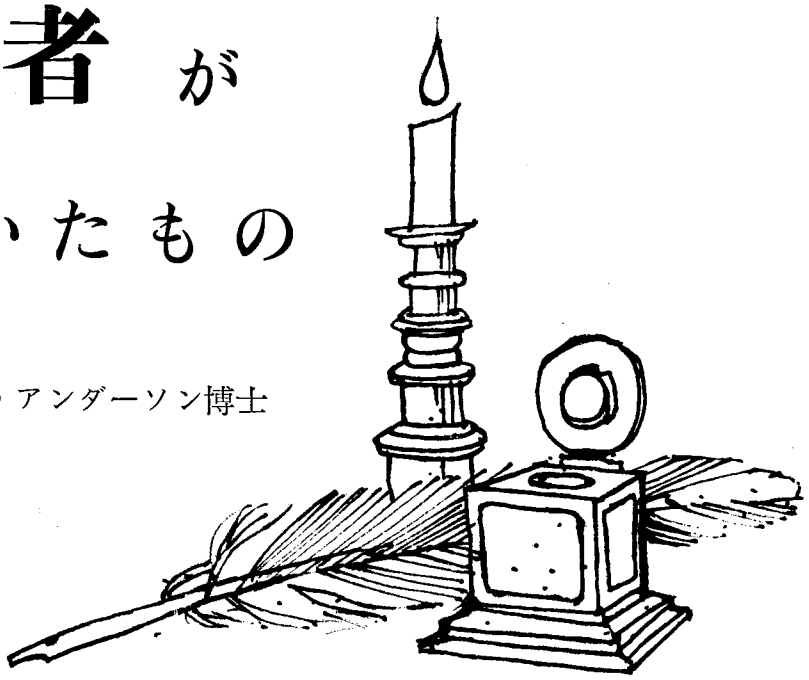
私たちは開拓者たちが総じて持ち，社会が強められ人々が恩恵に浴し，互いに結ばれた考えと方法を失わないように願おうではないか。私たちの間に兄弟愛と隣人愛が保たれ，日増しに強くなるような状態をみなぎらせ，私たちが一つとなることができるように祈ろうではないか。古えのルツが言ったように「あなたの民はわたしの民，あなたの神はわたしの神です」（ルツ1:16）と感じることができるよう祈ろうではないか。

私は開拓者から受継いでいるものを誇りに思っている。開拓者の奉仕と犠牲の記録は私の誇りである。今日私たちは開拓者から遠く離れ，時には彼らの業績を忘れがちである。私たちは開拓者が苦難，苦悩，迫害を経たにもかかわらず，喜びに満ちてグレートソルトレークに到着したことを覚えるべきである。

その受継ぎを教会の組織の日までさかのぼることのできる人々，最近改宗した人々を含めて，私たちの一人一人が末日聖徒の開拓者が大いならしめた特質と特性を生活の中で実践することを私は祈っている。

予言者が受継いでいたもの

リチャード・ロイド・アンダーソン博士



予言者ジョセフ・スミスに関して知られる最初の自叙伝的著述によれば，1805年の誕生が「善い父母から生まれ，私にキリスト教を厳格に教えた」[1]ことが強調されている。善い父母だけでなく，すばらしい祖父母にも恵まれていた。ジョセフ・スミスは殉教する一年前，「他の宗派」のためにも勇敢に宗教の自由を擁護し，そして，「私が祖父母のひざの上であやされていた時，心に教えられた自由への愛」[2]のために戦った。予言者の少年時代を細かく調べてみると，祖父母の理想とするところが孫に伝えられていたことが証明できる。

予言者の父方の曾祖父，サミュエル・スミスは，町と州の立法機関にすぐれた貢献を果たした。彼の死亡記事には「祖国の自由への誠実な友，キリストの教えの熱心な支持者」[3]と記されている。サミュエルの息子，エイジェルはアメリカ独立戦争の時，当時8歳を頭に5人の子の父親であったが，一兵士としてこの愛国の伝統を発揮した。祖父エイジェル・スミスはマサチュセッツ，ニューハンプシャー，ヴァーモントで長年農場経営者として名を知られていた。若い時は，町の書記[4]を勤めていた。最も高い地位についたのは，エイジェルと息子たちがヴァーモント(予言者が生まれた地方)のタンブリッジで広大な土地を有していた時のことである。そこでエイジェルは，三人からなる町の運営委員会の一人，行政委員に二度選ばれた。また，町の集会の調停員，道路測量技師，首席陪審員に選ばれ，検察委員会の一員に任命された[5]。

当時エイジェルが政治と現実をどのように見ていたかは，タンブリッジで書いた一通の手紙に現われている。この中で彼は，「自分の仕事に心せよ」[6]を十一戒として逸話を述べている。

予言者が祖父から教えられた「自由への愛」を引きついで抱いていたことに関しては，容易に証明できる。エイジェルは自由が神のみこころのもとに合衆国から世界にひろがることを望んでいたからである。「神は輝かしい独立戦争を通じて我々を導かれ，平和と自由の約束の地をもたらしたもうた。神はその定めたもう時と方法により全世界に同じ幸福をもたらしたもうことを信ずる。」[7] ここで，政治的な見解と

アンダーソン博士はブリガム・ヤング大学歴史，宗教学の教授を勤め，新約聖書と教会歴史に関して幾多の記事を書いている。現在，シャロン東ステーキ部プリーザントヴィコウ第1ワード部で福音の教義クラスの教師をしている。

宗教上のそれとが一体となっている。

それはエイジェルがダニエル書の2章が「君主政治と教会圧政はすべてこなごなに砕かれ」[8]て文字通り成就することを信じていたからである。1830年彼が死ぬ前にモルモン経について語ったとしても何ら不思議ではない。彼はそれが真実なものであると語った。家族の中から世界を変えるような何かが生じることを知っていたからである[9]」

エイジェルはニューイングランドで間違いなく組合教会に属していたが，その神学には反対していた。ジョージ・A・スミスは10代の頃，年老いた祖父とよく語り合った。彼は祖父を「すばらしくそう明で陽気な老紳士」であったと語っている。しかし，エイジェルは，「息子のジョセフ〔シニア〕を除いては子供たちを甘やかしすぎていたのではないかと思う。子供たちはそれぞれ，契約派[10]，組合派[11]，長老派[12]の教会に属していた。エイジェルは亡くなる少し前に，全世界の回復に関する教義について多くの原稿を書いた。[13]」

これはタンブリッジ町記録に基づいたものであるが，1797年に普遍救済協会が組織され，会員のうち三人は，エイジェル・スミス，ジェシー・スミス（長男），ジョセフ・スミス（予言者の父親）であったと記録されている。キリスト教反対者で結成された普遍救済論者は，正統派の罰の教義を否定し神の愛は「普遍」であってそのため全人類が救われるという信仰を持っていた。1803年に開かれた会議で以下の教義が支持された。「我等は神は唯一であって，その御性質は愛であり，それが主イエス・キリストに表わされている。また恵みの聖きみたまにより，神は最終的には全人類の家族に聖さと幸福を回復したもうことを信ずる。[14]」エイジェル・スミスは，子らの一部を永遠の苦しみで罰する神を信じていなかったのである。

推量を入れなくともスミス家の伝統について考えることができる。予言者が生まれる6年前，祖父エイジェルは，「愛する妻と子供たち」に対し，奇妙だが愛情のこもった「私の愛する私自身たちへ」という宛て名で哲学上の勧告と実際的な勧告をしたためている。金銭には換えられないこの貴重な原文（現在は教会歴史事務局にある）からエイジェルがキリスト教的な神を敬う心を持っていたことがうかがえる。エイジェルは信頼に足る人となるための実際的な倫理を述べている。これは1902年，エイジェルの曾々孫で，当時若き歴史記録者であった現在の大管長の手により出版された。[15]」

残る者に託したエイジェルの遺言は他ならぬイエス・キリストへの信仰，キリストの罪の贖いと復活の力に対する信仰を述べたものだった。愛，正道，義において，キリストのようになることを訴えている。これは詐欺師や狂信者が記したものではない。

「神に対してすべてを真剣になせ。神を思う時，神に話す時，神に祈る時。いかなる方法によるとも，神について述べる時は熱心になせ。神のみ名と神の属性をいたずらに口にしてはならない。真理以外の証を神に求めてはならない。真剣に考えた上で確かな理由がある時にのみ，それを求めてもよい。[16]」

神のもとに強く責任を感じていることがほとんどすべての文章に表われている。富と地位の様相を呈した誤りをあばき，家庭の忠誠，寛容，実際的な慈悲，愛国心，神への感謝を強調している。「お前たちがそれによって生きることも死ぬこともでき，向上し支配できるような，公正と正直な方法で[17]」すべてをなすようエイジェルは命じている。エイジェルにとって真の宗教とは，空虚な儀式からなるのでなく，個人の善からなり，聖典の「二人の証人」と「十分な理由」によって試されなければならなかった。このような受継ぎは簡単に消滅するものではない。祖父エイジエルは家族のうちで両親となった者たちに対し（その中にジョセフ・スミス，Sr.がいた），子供に対する義務についてこのように言っている。「子供たちがその世代にあって役立つ者となるよう，徳のうちに子供たちを育てることを第一の仕事とせよ。[18]」

エイジエルが子供たちを「徳」のうちに育てる上で，マリー・デューティ・スミスの実質的な援助を受けたことは間違いない。エイジェルは1799年，「心から愛する妻」に讃美の手紙を書いている。「私の持つ力の限りを尽して」エイジェルは「あなたの私に対する親切と忠実に[19]」感謝している。マリー・デューティ・スミスは，予言者となった孫の招きで4人の息子たちと共に信仰に入ろうとカートランドに着いた時，93歳でなおも元気で愛情にあふれていた。エライザ・R・スノーはその時マリー・デューティ・スミスの「陽気な雰囲気」を目撃している[20]。

ジョセフ・スミスの母方の祖父の文章には理想主義と高潔さとが大理石のように発掘される。エイジェル・スミスの能力や業績とは幾分異なるが，ソロモン・マックはスミス家の受継ぎに匹敵するすぐれた教訓を残している。ソロモン・マックは開拓者として，二つの戦争を経験した兵士，水夫として，商人，貿易商，農夫として，特異な危

険に満ちた人生を歩んだ。彼は生涯を終える前，肉体がやつれ，霊が謙遜になった時，主との調和を感じ，個人的な啓示に関して書いている。

ソロモンはめざましい指導力は持っていなかったが，不利な場合にもねばり抜く根気強さがあった。ソロモンの自叙伝には，「多くの不運な浮沈を繰り返した無学なニューイングランド人の生涯[21]」と記されている。伝記をよく読んだことのある人ならば，異常な困苦に際しても決して投げ出さない人の英雄的な精神を知っているであろう。両親が突然貧乏になったため，ソロモンは徒弟として奉公に出され，宗教教育や義務教育も受けずに食い物にされた。成年に達してこの束縛から脱すると，フランス・インディアン戦争に出征し危く死ぬ目にあった。ソロモンは軍隊時代を，心身の疲労，病い，人間無視と書いている。だが（レーク・ジョージジャンプレイン戦区での）二つの出来事は戦争の暗い背景に対する彼の人格を表わしている。牛車に荷物をのせて運んでいる途中，不意に何人かのインディアン兵士にとり囲まれた。武器も持たず，たった一人のソロモンは，「生きるには，策略を使ってだますしかない」と思った。そこで大声で仲間を呼び，実際にはいない援軍を背に，頭から突進した。

「私にはつえ以外武器はなかったがインディアンめがけて突進した。一人が応戦するように命じたが，威圧感を覚え，インディアンは逃げてしまった。だが，これが私のできる精一杯のことだった。[22]」これと同じ自分だけを頼る勇気を彼の孫である予言者も持っていた。武器といえば勇気だけで，ニューヨークの家の周囲で威かくする暴徒を追い払った話がある。

二つ目の戦争のエピソードではソロモンの自己犠牲が表われている。ニューヨーク，ティコンデロガズの前線攻撃が失敗に終わり，多くの損害をもたらした直後，何人かの移住民が待ち伏せするため巡回歩哨に送られた。ソロモン・マックはイスラエル・プットナム部隊の先頭に立って行軍し，先制攻撃の矢面に立った。そして，プットナムが捕虜になった（彼は奇跡的に生きのびたのだが）。ソロモンの言葉によれば，「敵は雲のように立ち上って，火を吹いた。……トマホークや銃弾がひょうのように耳もとをかすめた。[23]」この時，すぐさま退却して体制をたてなおさなければ命が助かる道はなかった。戦いに全力を尽しながらも，ソロモンは自分の命を危険にさらして他人を救うためにとどまった。「私が走っていて，ふと道のわきを見ると，一人の男が傷ついておりインディアンが彼に迫っていた。私はすぐさまその中に飛び込んで行った。[24]」同僚の司令官ロジャーズ少佐と目くばせして「不屈の」アメリカ人は奇襲攻撃をかけた[25]。ソロモン・マックもその勇者の一人だった。

ソロモンは事故で不具になっていたが，独立戦争中，陸上，海上で従軍し後に武装船に乗り込んだ。市中工業の戦争景気は，苦難の時期や不景気とともに後退して行った。そしてソロモンの寛大な心をもってしても，経済の危機に対応することはできず，「何人かの人の保釈金を出すに至って[26]」貧困もまぬがれなかった。ソロモンは年老いて（孫のジョセフ・スミスが6歳の時），自叙伝を書いた。数々の事故，病い，不運で謙遜になった老ソロモンは祈りによって主を求めるようになった。そして自らが見出した大いなる信仰を人に分け与えたいと願った。彼は肉体的にも霊的にもいやされたという証を述べた。ソロモンの困苦についてのこの話は，神が教えるために彼を謙遜にされたことを物語っている。そして，「あらゆるものが新鮮で美しく見えた。私は隣人や敵を愛することができる。彼らのために祈ることができる。あらゆるものが喜ばしく見える。キリストの愛は美わしい。[27]」

ソロモンは自分の人生を振り返って自分が子供のころには得られなかった精神的な指導を子供たちに教えるよう両親である者たちに願った。「両親たる者よ，主の道にあって子供を教える方法に心を配りなさい。子供に自分の力でできないようなことを命じてはならない。果たせることだけを約束しなさい。言葉にも，行ないにも，判断にも良き模範となりなさい。[28]」キリストの教えを聞くのは遅すぎたが，ソロモン・マックは生涯を通じて厳格な徳の模範を示し，すばらしい息子娘たちを生み出した。子供たちと話し合い，教育する場合に彼は聖書の「唯一の教師」である妻に全幅の信頼を置いていた[29]。孤立していた農場にあって，リディア・ゲイツ・マックは進んで子供たちの心と霊に栄養を与えたのであった。

「普通教育の各分野を教えるほかに彼女は朝晩子供たちを集めて祈ることを教え，やがて，彼らを造ったお方に身を捧げることと共に互いに愛し合うことを教えた。このようにして私の最初の子供たちは，神を敬うこと，礼儀正しさ，反省する習慣を身につけた。これによって後に生まれた子供たちを同じ幸福な道に導くことが非常に容易になった。[30]」

エイジェル・スミス，ソロモン・マ

ックとその妻たちの信念を明らかにすると，ジョセフ・スミスを二つの方法で理解できるようになる。第一は予言者の両親がスミス家，マック家で形成された特質を間違いなく持っていたということであり，第二は予言者は祖父たちと幾らか直接的な接触があって，祖父は（予言者の語るように），戦い取った自由の価値を教えたということである。一番大切なことは祖父の業績と理想が尊ばれ，若きジョセフ・スミスは両親からそれを教えられたことである。ジョセフの祖母リディア・ゲイツ・マックに関して言うならば，彼女は実際1816年家族がニューヨーク州西部に移るまで「しばらくの間」ジョセフ・スミスの家族と「共に暮していた」。予言者もルーシ・マック・スミスも西へ向かう旅の始めは祖母も一緒だったと記している。リディア・ゲイツ・マックは別れに際して「最後の言葉」として，ルーシー・マック・スミスに「私が別のもっと良い世界でお前を抱くことができるように，生命のある限り神の業に絶えず忠実でありなさい[31]」と語った。自叙伝を読んだ者なら若き予言者が深遠な理想と道理にかなった宗教上の関心を持っていたことを否定するわけにはゆかない。ジョセフ・スミスの祖父の知性に基づく誠実さはジョセフ・スミス自身のそれを証明する上で大いに役立っている。

註

1．手書歴史1832年，ディーン・ジェシー引用，「ジョセフ・スミス最初の示現の初期の出来事」ブリガム・ヤング大学研究室，9巻（1969年春）P.279
2．ウィラード・リチャーズ所有，ジョセフ・スミスの日記，1843年7月9日教会歴史5巻P.498，ジョセフ・スミスより引用。
3．セイラム・ガゼット，1785年11月22日。
4．ジョージ・ワルドー・ブラウン編，デリーフィールド町の初期の歴史，現在のマンチェスターN.H.，マンチェスター歴史協会収集8，9巻，1779～1786年参照。
5．ヴァーモント州オレンジ郡の土地登記簿，ヴァーモント州タンブリッジ町史，系図教会マイクロフィルム収録。
6．ヴァーモント州タンブリッジ，ジェイコブ町に宛てたエイジェル・スミスの書簡，1796年1月14日，マサチュセッツ州セイラムのエセックス協会の原文より，句読法は変更を加えた。西部における最初の出版物として，1872年7月16日ジョージ・A・スミスによりデゼレト・ニュースに掲載。
7．同上。
8．同上。
9．説教集，ジョージ・A・スミス，1857年8月2日，5巻（1858），P.102。
10．契約派—宗教の自由のために戦ったスコットランド人の団体。長老派に編成された。
11．組合派—地方の会衆を重視するプロテスタント教会の一宗派。
12．長老派—信者全体に管理権を与えている長老派教会の会員。教義はカルビン派の流れをくむ。
13．ソルトレーク市のH．グッド博士に宛てたジョージ・A・スミスの書簡，1870年5月31日 P．4
14．A．B．グロッシュ「普遍救済論者」I．ダニエル・ルップ編，合衆国内に現存する宗派の歴史（フィラデルフィア1844年）P.727。
15．ジョセフ・フィールディング・スミス，「スミス家の出来事とトップスフィールドのエイジェル・スミス」トップスフィールド歴史教会収集，8巻（1902年）P.91～96。
16．同上，P.92，引用文は原文と一致。
17．同上，P.94。
18．同上。
19．同上。
20．エドワード・W・チューリッジ，モルモンの女性(ニューヨーク，1877年)P.98。
21．ルイス・カプラン編，アメリカ人自叙伝の伝記（ウィスコンシン州マジソン，1962年）P.188。
22．ソロモン・マック，ソロモン・マックの生涯の物語（ヴァーモント州ウィンゾル，1811年）P.6。
23．同上。もう一人の兵士がインディアンのことを覚えていた。「トンプソンマックスウェル少佐物語」エセックス協会歴史収集，7巻（1865年）P.100
24．マック物語，P.6。
25．ロバート・ロジャーズ少佐の日記（ロンドン，1765年）P.118。
26．マック物語，P.17。
27．同上，P 23～24。
28．同上，P.24。
29．同上，P.20。
30．「ソロモン・マックの日記」，ルーシー・マック・スミス，ジョセフ・スミスの横顔（リバプール1853年）P.19，ニブレー・ピーターソン編母親によるジョセフ・スミスの歴史（ソルトレーク市1915年），P.6，ルーシー・マック・スミスの引用は非常に正確であるため，母リディア・ゲイツ・マックに関するこの文章は，ソロモン・マック自叙伝に書かれていないが，父から受けた原稿をもとにして書かれたものに違いない。ルーシー・マック・スミスはたびたび，「父自身が書いた父の生涯についての文章」と，「父の日記」から引用していることを述べている。
31．ルーシー・マック・スミス，P.69。またニブレイより引用 P.62。

予言者ジョセフ・スミスの人間性

レオナード・J・アリントン博士

回復の予言者は哲学者，社会の建設者，軍隊の司令官，空想家と言われてきた。この時満ちたる神権時代に福音を回復するよう神より命じられたジョセフ・スミスは活力にあふれ，頭脳明晰であったと同時に，快活で，すばらしい指導者であった。ジョセフの生涯に関する豊富な資料を調べてみると，回復にあたって偉大な役割を演じた彼の教えと共に個人としての性質に感銘を覚える。

ジョセフ・スミスは物心両面で一致した家庭に育まれ，幼い時から個人の成長と進歩にとって家族が大切であることを体験してきたのである。スミス家を知る人々や予言者の母親であるルーシー・スミスの回想録によると，この家族が一致団結していたことが伺われる。スミス家はそろってカエデ糖みつを精製し，2，3人で近所の家の仕事を手伝いに行き，火を囲んで話を楽しみ，日曜日には近くの村へ説教を聞きに行っていた。

予言者の生涯の心暖まる数々の出来事から，予言者が両親に心を配っていたことがうかがわれる。足の手術を受けた時，自分が苦しんでいる様子を見て欲しくないため，母親に部屋から出て行ってもらうよう涙ながらに頼んだこと，1830年父親がバプテスマを受けた時心から喜んだこと，両親が病気の時一週間もの間徹夜で看病したこと，父親の意見を尊重したことなどである

ジョセフは日記にこう記している。「常に慈悲と博愛に満ちた私の母は幸いであり，主のみ手が常にある私の父は幸いである。」これは何とすばらしい祝福であろうか。1835年予言者は両親たちに向かって次のように述べている。「十分な年月と経験を経た両親こそ，最も有益な助言を与えることができる。」予言者は定住の地を決めるとすぐに，彼の両親のための家を建てるよう手配していた。それは両親と共にいて，助言を受けたいと願っていたからである。ジョセフは両親の特権というものを強く感じていた。そのため両親の許可なしに若人にバプテスマを施さないよう宣教師に注意していた。一例をあげると，1834年「シオンを贖うために進み行くイスラエルの力」を求めていた時，ジョン・リッグスという十代の若者が両親の意見にさからって加わりたいと申し出た。ジョセフは熱心に求めるその若者にこう言った。「父親のもとへ帰り，21才になるまで父親に従いなさい。そうすれば，シオンを建設するために進み行く者たちに約束されたすべての祝福を受けることができるであろう。」

ジョセフ・スミス（初代）家の強さは，回復にあたって各々が示した支持特にジョセフとハイラムの友情に表われている。ジョセフとハイラムはほとんどいつも一緒だった。一方がいなければ二人とも完全ではないといったような間柄だった。「私はハイラムに対し死よりも強い愛を持っていた」とジョセフは語っている。「ジョセフとハイラムがいつ，どこで，どのように会っても，必ず非常な喜びを表わしていた。〔血のつながった霊である〕二人は聖霊の賜と力に満たされていた」と家族の友人であったウィリアム・テイラーは記している。

家族の愛と一致という模範の影響を受けてジョセフは1827年エマ・ヘイルと結婚した後，17年後に暗殺されるまで暖く，愛情に満ちた関係を築いていた。ジョセフがエマに宛てた手紙（エマがジョセフに宛てた手紙），ジョセフ個人の日記，公式な歴史記録，これらすべてにジョセフが家族に，家族がジョセフに献身的であったことが見られる。「私がパンとミルクを少し欲しいと思っていると，妻は食欲をなくすほどたくさんの食べ物を机の上にのせるのですよ」と予言者はウィリアム・W・フェルプスに語った。

どの夫婦でもそうであるように，予言者とエマも時々意見が分かれることがあった。この不一致が険悪になると二人は聖霊のもとへ行ったのである。結婚後間もないある日の朝，ホイットマー家に滞在していた時，ジョセフとエマは口論をした。そしてジョセフは二階へあがって金版を翻訳しようとしたが，全く進まなかった。そこで予言者は森に行って祈り，帰ってきてエマに許しを求めた。そして仕事にとりかかると，翻訳はすべて順調に行った。また後に，予言者を称えるためのパレードに出席する準備をしていた時エマは予言者の服装について不平を言った。するとジョセフは「一番良い服」に着換えた。

ジョセフとエマの最初の子アルヴァはペンシルバニア州ハーモニーで亡くなった。当時ジョセフはまだ翻訳に携っていた。エマが二度目に妊娠して，今度は双子が生まれた。サディウスとルージアという名前がつけられたが，二人とも三時間程で亡くなってしまった。その同じ日にジョン・マードック姉妹がやはり双子を生んで，彼女自身が亡くなったことを知ったジョセフは悲しみに打ち沈んだエマと共にマードック家の双子を養子にもらいうけ，ジョセフとジュリアと名づけた。この双子は後にハシカにかかり，ジョセフとエマは数日間徹夜で看病した。ある夜エマが非常に疲れていることを知ったジョセフは，病状の軽い方の娘をつれて休むように言い，ジョセフは息子の方を看病した。幼いジョセフはうたたねをしていた。突然「人殺し」というエマの叫び声にジョセフはとび起きた。すると10人ほどの男たちに囲まれており，外につれ出された。暴徒はドアをあけておいたため，子供は冷たい外気にさらされ，数日後に死んでしまった。けれどもジュリアは15才位まで生きた。ジョセフはジュリアをこよなく愛していたため，エマに宛てた手紙の随所にジュリアのことが書かれている。

暴徒の襲撃，投獄，裁判，その他教会の大管長としての困難に見舞われた波乱万丈の生活であったが，ジョセフはエマのお産の時はほとんど付き添っていた。マーシー・トンプソンは予言者のやさしさを思い出して次のように記している。「奥さんのエマが病気で寝ていた時，予言者はベッドに付き添って，心がやさしく愛情にあふれた人だけが感じることのできる最大の心配と同情を寄せているのを見ました。」1838年から1839年にかけて数か月間ミズーリで投獄された時，予言者はエマにこう書いている。「私はいつも子供たちジュリア，ジョセフ，フレデリック，アレキサンダーのことを考えている。父はまだ生きていることを伝えてくれ。神は私たちがまた会うことを許してくださる。……もしこの世で会えなくとも，天で会えるだろう。……私の心は満たされている。」

ジョセフとエマの6男ドン・カーロスが1841年生後14か月で死んだ時，予言者は近所に住むマッキンタイヤー姉妹の娘の一人を養女に欲しいと頼んだ。マッキンタイヤーは娘を手放したくなかったが，ついに毎晩自分の家に連れて来るという条件で同意した。マーガレット・マッキンタイヤーは後にこう述べている。「予言者は時間通り来て，また毎朝ひき取りに来ました。ある晩いつもの時間に来ないことがあり，母がどうしたのか見に行きました。すると予言者は赤ん坊を小さな絹の布でくるんで座っていました。赤ん坊をひざにのせ，むずかっている赤ん坊をだまらせようと歌を歌っていました。母が抱くと静かになり，予言者は私の家までついてきました。翌日の朝予言者が赤ん坊を迎えに来た時，母はもう一人の娘サラを渡しました。二人

はとてもよく似ていて，普通の人は見分けがつかないほどでした。けれども母がサラを渡しますと，予言者は首を振って，「これは私のマリーではないですね」と言いました。そこで母がマリーをゆりかごから抱いて渡しますと，予言者は誇らしげにマリーを抱いて家に帰りました。……奥さんが健康になると私の娘を預りに来なくなりましたが，よく来てマリーと遊んでいました。」

ジョセフは家族を非常に大切にしていた。次に述べる1834年3月27日の公式の日記に見られるように，予言者が「家にとどまって，家族と大いに楽しんだ」例はたくさんある。改宗したが後に背教したまたいとこのジョージ・A・スミスによれば，彼が東部からカートランドに着いた時，ジョセフは「神の賜物と力により」翻訳していた部屋から階下に降りてきて，自分の子供たちとはしゃぎ回って遊び始めた。ジョージ・A・スミスにとってこれは予言者にあるまじき行為であった。そのため背教したのであった。

予言者の日記には，家族と演奏会，劇場，サーカスに行ったこと，ミシシッピー川でボート乗りに連れて行ったことが記されている。家族はたびたび火を回んで「家庭の夕べ」を開き，ゲームをしたり，読書をしたり，一緒に勉強していた。1843年2月8日，予言者はこう記録している。「午後4時，私は息子のフレデリックと共にスケートをしに行った。」

これらの出来事は予言者の人格の暖かさ，社交性，人々の必要と望みに心から応える態度が表われている。ある人の回想によると，カートランドで，集会に出席するために大人や子供たち

が幌馬車に乗ってやって来ると，「ジョセフはできるだけ多くの幌馬車の所まで行って，一人一人と心からの握手をした。特に隊の子供と赤ん坊に対しては，やさしく手に抱いて愛の言葉と祝福を与えた。予言者は無邪気で純粋な者たちを愛し，子供と語り合うことに最も完全な愛を見出していたようである。」

エバリン・バーディック・ジョンソンは幼いころカートランドで母が掃除のため，床の上に置かれていた時のことをこう覚えている。エバリンは男の人の声を聞いて見上げると，背の高い人がほほえみながら階段を昇って来た。その人は母に何か言うと母は入るように言った。「その人は私を見ると抱き上げて左腕に座らせ，大きな鏡のある部屋へ入って行きました。私たちは鏡をのぞき込みました。そして，振り返って私をおろすと，父はどこへ行ったのか母に尋ねました。その人が部屋から出て行くと，母はその人が神の予言者で，どんなにすばらしい人かを話してくれました。」

またある時予言者が人をたずねて行くとその人は不在で，そこにのどをはらして痛がっている子供を見つけた。「彼は私をひざの上にのせて，やさしく灌油し，祝福してくれました。そして私はなおりました。それからのどがはれることも，痛むこともありませんでした」と，その子供は後に語っている。

ほとんどすべての人がジョセフの他人に対する関心，他人の幸福への関心を感じている。ジョセフは大人になってもレスリングが好きだった。よく「棒引き」をしたり，若い人々との競技に参加した。腹臓なく意見を述べ，同僚たちを楽しませるためによく冗談を言い，「貧しい人たちと一緒に歩いたりした。ジョセフにとって他人はいなかったのである。」他の教会役員と同じように，予言者も手仕事を行なったが，みぞを掘ったり，到着した人の荷物を家へ運んだり，りんごを収穫したり，庭で畑仕事をしたり，ジャガイモをくわで掘ったり，材木を引っぱったりした。

ある日の午後，アンドリュー・ワークマンと何人かが予言者の家の近くのへいに座って予言者と話をしていた。そこへ一人の人がやって来て，町から少し離れているある貧しい兄弟が前夜家を焼失したと言った。男たちは顔を見合わせて，かわいそうなことだと口々に言っていたが，「ジョセフはポケットに手を入れて，5ドルとり出し，『私はたった5ドルしかあげられないのですまないと思うが，あなたたちは何でかわいそうと思うのか』と言っ

た。」

殉教する少し前，予言者はノーヴー市の人々を守りに来させた何人かの会員たちを待っていた。その日は雨で道はぬかるんでいた。75人のうち8人は乗物を使わず，到る所で腰まで水につかって歩いてきた。「私たちは昼ごろノーヴーに着いた。そして神殿の近くでフォスターの大きなレンガ造りの家の前にテントを張った。キャンプの道具は道の傍に置いておいた。私が荷物の見張りをしていると，予言者ジョセフが丸太のところまで馬でやって来て，手を伸ばし，叔父や叔母のことを尋ねた。予言者は私の手を握って，私が丸太に足をかけなければならないほど強く引いた。馬を道の端の方に向けると私を一歩一歩引いて行った。木に血の跡がついているのを見て予言者は足をどうしたのか尋ねた。草原の草が私のくつを切りきざみ，足を切ったが何でもないと答えた。すると予言者の顔にあてた手がぬれ，私が見上げると，ほほに涙が伝わっていた。予言者は私の頭に手を按いて，「愛する若者よ，神の祝福があるように」と言って，隊の中に同じような状態の者がいるかどうか尋ねた。何人かいると答えると，予言者はルツラップ氏の店へ行き，「この人たちにくつをあげて下さい」と言った。ルツラップは「くつはない」と答えた。するとジョセフは，すぐさま「それでは長ぐつをあげて下さい」と言った。そして私の方を向き，「ジョニー，軍隊は解散して，帰るだろう。私は知事の保護のもとにカーセージへ行って裁判を受ける」と言った。それから，私の方に身を寄せ，片方の手を私の頭に按いて，「こわがることはない。あなたはイスラエルが平和のラッパを吹き鳴らすのを見るであろう」と言った。

ジョセフの能力に関する大切な事はジョセフが静かな英雄であったということである。

「1837年夏のある晩，二人の旅行者がオハイオ州北部のペイネスビルの町に到着し，友人の家を訪れて，夕食を共にした。彼らが食事を終えないうちに邪魔が入った。群衆が集まり，敵意を見せていたが，やがて怒りを含んだのしりに変わり，殺意を見せた。そして家の主人に家を引き渡すよう要求した。しかし，友人に危害を加えるのを避け，主人は裏口から逃れさせて，暗い所を選んで行くように言った。逃走がわかると，馬に乗った暴徒は行ったと思われる道を追った。かがり火がともされ，見張りが置かれ，町中を捜し回った。二人の旅行者は用心深く普通の道を歩かず，森や低湿地を選んで行った。かえってかがり火により道を避けることができた。しばらくすると一人が逃亡についてつぶやき始めた。病いと恐怖により力を失ってしまったのだった。同僚は血に飢えた暴徒に捕えられるまま彼を残すか，自分も危険にさらしながら助け続けるかのいずれかを選ばなくてはならなかった。後者を選んだ彼は，広い肩に病人を負い，時々休みながら，湿地と暗やみの中を進んだ。数時間後二人は人気のない道に出，やがて安全な所まで達した。この友人を助けるために身を捧げ，それをなしとげる力を持ったこの人こそジョセフ・スミスだったのである。」

ジョセフ・スミスは予言者，大管長事業家，政治家であった。けれどもジョセフの生涯は回復という第一の目標からも説明できる。すなわち，年長者の心を子供に，子供と若者の心を年長者に向けることである。回復にあたって正しい神学上の信条は欠くことができないが，家族の一致と世代の一致がなければ福音の回復に要求される個人と全体の霊性を培うことはできない。

引用

この記事で引用した逸話，物語，引用文は以下の資料による。ジョセフ・スミスの論文原稿欄，ソルトレーク市教会歴史図書館，ルーシー・スミス，予言者ジョセフ・スミスの横顔（1853年リバプール，ロンドン），「予言者ジョセフ・スミスの思い出」若人のためのインストラクター27巻（1892年），教会歴史（2巻，1897年アイオワ州ラモーナイ），ジョセフ・スミス，教会歴史（6巻，1901年ソルトレーク市），ルシー・ウォーカー・キンボール「自叙伝」典型的な女性，39巻（1900年11月），「予言者ジョセフの生涯の出来事」若い女性の雑誌，11巻（1900年4月），「予言者ジョセフ・スミス」若い女性の雑誌16巻（1905年12月）17巻（1906年12月）ジョン・ヘンリー・エバンズ，アメリカの予言者ジョセフ・スミス（1933年ニューヨーク），エドウィン・F・ベリー，ジョセフ・スミス物語（1936年ソルートレーク市），ラマー・C・ベレット，ディーン・ウェングリーン，エイス・S・ピルキントン氏の協力に感謝する。

アリントン博士は1946年以来ユタ州立大学の経済学教授，西部歴史季刊誌の編集長を勤めている。また数冊の本を書いており，モルモンと西部の歴史に関して100近くの記事を書いている。最近ユタ州立大学ステーキ部長会を解任された博士は現在キャッシ東ステーキ部ローガン第10ワード部に所属している。

相互依存：家庭と教会の目ざすもの

ウィリアム•G•ダイヤー博士

ブリガム・ヤング大学で新設された組織行動学部長を勤めるダイヤー博士は，人間関係の分野において広く著書を出しており，合衆国内の各企業で教育プログラムのカウンセラーを勤めた。またパキスタンとプエルトリコでも教育プログラムを監督した。博士は現在シャロン東ステーキ部エジモント第８ワード部で日曜学校の副会長をしている。

「手伝わないでちょうだい，お母さん。ひとりでしたいの」これは，６歳の女の子が，くつのひもを結ぶのを手伝おうとしていた母親に言った言葉である。ほとんどの子供はごく幼いときから，他の人の助けを借りないで，物事を独力でしたり，自分の力で何かをやりとげたいと思っている。

「お母さん，できないから手伝って」これは，自分の手に負えないはさみを使って絵を切りぬこうとしている同じ少女が言った言葉である。先程と同じ子供が，困難にあったり，助けが必要なときには，だれかを頼ろうとしているのである。

この２つの相反する傾向は，われわれすべてにあるものである。すなわち，自由になりたい，独立したい，ひとりで何かやってみたいという気持と頼りたい，自分の力が不足しているときには，勝手に自分を他人の手にゆだねたいという気持，この二つの傾向である。

両親や指導者は，この明らかに矛盾する気持を，子供や，指導される立場にある人の中に見ている。自己の判断や権威者の判断にたよるとき，成長するしないは別問題として，子供や下の者は様々の反応をおこすが，このようにして指導する者，される者，この両者の関係は高められるのである。子供や指導をうける立場の者は，この権威者からなんとかのがれようとしたり，自分には能力があることを示そうとする。そして困ったときには，この権威者のところへ助けを求めに行く。親，監督，管理者など，どんな指導者でも，その責任を果たすにあたって大切なことは，他の人を助けるときの態度であり，方法である。

親の中には，子供の依頼心を助長し強めるような行動をとっている者がいるが，その結果として，子供はひとりで適切に物事を判断できなくなってしまうのである。

大学２年になるジェーンは，学課の選択や，買物や，いろんな活動に関して，両親に助言を求めて，週に３回は家に電話する。彼女は両親に話す前にひとりで決定することに，非常な不安を感じるのである。両親は，ジェーンのことを手離しで喜び，友人に，娘は家族思いの，ほんとに家庭的な子で，そこいらの礼儀知らずの学生とは違うのだと誇らしげに語るのである。両親には，娘が自分たちの判断に頼り，たびたび相談のため，家に電話してくることがうれしく，自分たちが重要な存在であり，必要とされているということを感じ，娘との結びつきにしごく満足している。

上記の例は，強い依頼心と成長との関係におけるいくつかの要素を指摘している。支配する立場にある人は（この場合は両親だが）支配される立場にある人（娘）を，自分達の必要を満たすために使っている。彼らは，自分たちが，利己的であると指摘されると，

おそらく憤慨し，傷つけられるであろう。彼らは他人を犠牲にして自分のことを気づかっている点で利己的なのだが，意識的にしているわけではない。しかし彼らは，真の意味で利己的といえる。なぜなら，長い目でみた娘の将来の幸福ということを考えないで，知らず知らずに，自分たち自身の必要を満たそうとしているからである。

依存することが，正しく必要であることもある。力の限界を越えた時，助けを必要とすることも起こるであろう。だれでもひとりではうまく処理できないような事態に直面してどうしても，医者，教師，カウンセラー，修理屋，友人，両親等に頼らなくてはならない時がある。人が自分の能力をのばそうとせず，権威ある人との共同作業に加わろうとせず，その上自分は，指導，援助，他の人の影響なしには何もやっていけないと感じるようであれば，依存することも害になる。

人間はすべて完全に他人に依存する生活から始めるわけであるが，それから脱して子供を成長させるのは，その子に権限をもつ立場にあるおとなの責任である。他の人を成長させるため権限をどのように使うか，これはその立場にあるすべての両親，指導的立場にあるすべての人にとって重要な問題である。

多くの場合，権威ある人は，誤った目標を持つ。すなわち両親はただ行儀のよい子を望み，教師の期待することを言ったり行なったりする単におとなしいクラスや学生を望み，指導者は疑問をもたず命令に従う，いわゆるイエス・マンの部下を望む。これらの目標に到達しようとすれば，確実に，知らず知らずのうちに依存型人間を作ってしまう。興味あることに，依存型人間を作る指導者の多くは，この問題にひそむ自分の責任というものを認識しようとはしない。彼らはしばしば悲しげに叫ぶのである「われわれは，何をやるか言われるのを，ただじっとすわって待つのではなく，物事を率先してやる人間が必要だ」

もう一つの行動の傾向として，自由に，ひとりでそれをやりたいという欲求がある。英国の哲人である，トーマス・ホッブスのように，人間の根源的性質は，それぞれが自我中心の世界をうちたてようとする。万人の万人に対する状態であるとする人もいる。他の人を考慮しないで皆が文字通り好き勝手なことをやれば，われわれは無政府状態になってしまう。

親はこの傾向を子供のうちに見出し，その芽をつみとり変えさせようとする。子供はおもちゃをひとりじめにしようとし，親は他の子供とおもちゃをいっしょに使わせようとする。子供は日曜学校の間教会の中をかけまわろうとするが，おとなは子供がじっと座っていることを望む。子供はまた，食べ物の好き嫌いをするが，母親は料理をきれいに食べてもらいたいと思う。

方向づけ支配しようとするおとな。それに対し自分たちの思うままに自由に行動し，独立しようとする若者，この両者の間には深刻な（いつもそうとはかぎらないが）闘いがあるように思える。相互依存ということの中にはこの根源的闘いが潜んでいる。ある人々は，権威ある人々に抵抗することに心を奪われ，それらの人々の影響力を拒む方法を見つけようと，それに多くの

時間とエネルギーを費している。彼らはたいてい，権威ある人の要望をなぜ遂行することができないか，なぜそうすべきでないかの理由を見出し，このことを一種の自己満足的予言で証明しようとする。

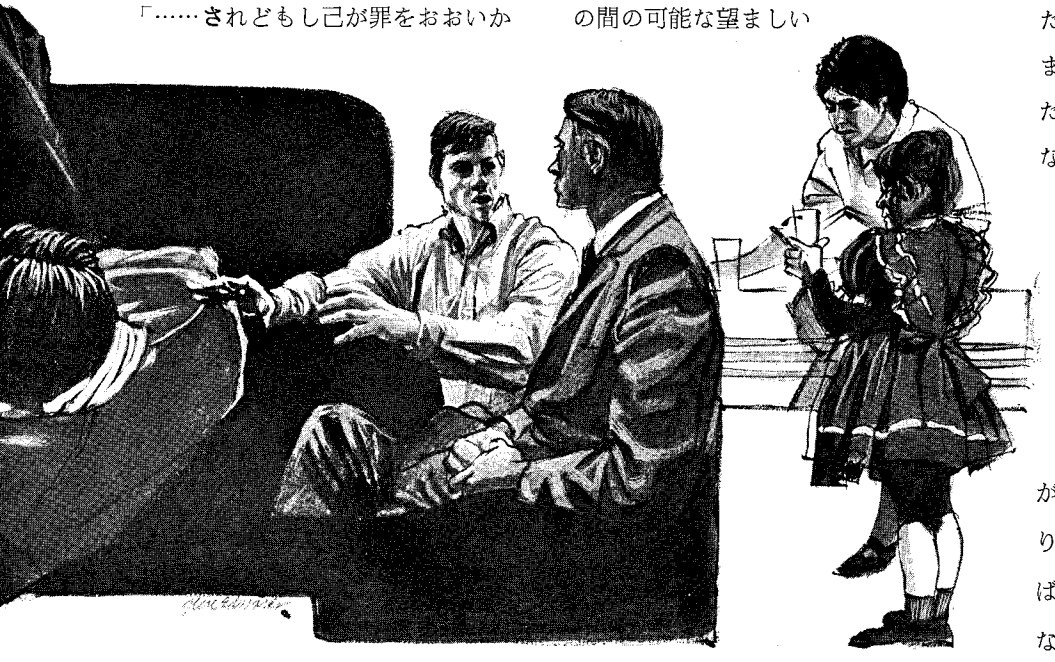
この種の消極的な反応は，時として親，教師，上役，指導者等の権威者の誤った取り組み方によることがある。おそらく権威者は個人の人格的尊厳を傷つけ奪うような方向に，従属的立場の者がもっていくであろう質問や討論あるいは会話の中にゆとりをもたせないということは，すなわち両親が子供に「うむをいわせず」従わせたがるのと同じである。

そのような態度こそ多くの人々の中に強い反抗的反応を生むのである。

ある指導者は，だれが支配者であるかを示すために，故意に，人が疑問に思ったり，反抗するような事態を作っているようである。こうすることによって，他の人間を支配するという一種の秘かな喜びを味わっている。主は権威の使用と濫用について次のように述べておられる。

「……されどもし己が罪をおおいかくさんとし，われらの高慢，空しき野望を充たさんと企て，また幾分にても正しからざることによりて人の子らを支配し，統御し，強制せんとする時は見よ諸天は退き去り，主の『みたま』悲しむ。主の『みたま』退き去らば神権またはその人の権威は終りなり。われら悲しむべき経験によりこの事を知る。およそ殆んどすべての人間は，少し許りの権威を得たりと思うや，忽ち正しからざる支配を始めんとする生まれつきの性癖あり。これすなわち，召さるる者は多けれども選ばるる者少き所以なり。」（教義と聖約121：37，39，40）

しかしながら，反発や反抗が，いつも権威ある人の側の責任であるとはかぎらない。権威ある人は，適切に行動しているが，従うべき者が，権威者に対して憤りやすく反抗的で，どのように上位の者が振舞おうが，いつも拒絶的に反応することがある。この場合，相互作用を新しい，より効果的な段階にひきあげるには，両者が自分の態度を反省し，転換をはかるように行動する必要がある。権威者とそれに従う者の間の可能な望ましい関係は相互依存である。すなわち互いに助け合い，共同して他の人の能力を使うことである。ここでは独立心をとりあげない。なぜなら独立心をとりあげると，下の者に，権威から自由で，好き勝手をしてよいのだという暗示を与えることになるからである。独立するということは今日の世界では，最も有効な行動ではない。それが，家庭，学校，教会，職場や役所，地域社会，国，世界であろうと。必然的にわれわれは相互に依存しているのである。残念なことに多くの人は，相互依存ということを知らないでいる。福音から，人間の行動の学問分野を研究する作家や学者から，わたしたちは権威ある立場のものが身につけ，相互依存へ導く次のような行動をあげることができる。



1 **「愛情と関心」** どのような人も権威ある人が，言われるとおりにやるからというのでなく，一個の人間として自分のことを気にかけているかどうかを知りたがるものである。救い主は「もしあなたがたがわたしを愛するならばわたしのいましめを守るべきである」（ヨハネ14：15）といわれたが，「もしあなたがたがわたしのいましめを守らないなら，わたしはあなたがたを愛さない」とは決して言われなかった。

ある行動は嫌いということはあるかも知れないが，われわれは，その個人を，無条件に愛さなくてはならない。あまりに多くの親や指導者が，人間関係の根本として，条件付きの愛を示している。つまり，「あなたが私の望んでいることをなし，私に頼り，私の必要を満足させてくれるならば愛そう」というのである。そのようなものを愛の基準にすれば，それは，

依存か，反抗かのどちらかに到達することになる。親は腰をおちつけて子供と愛情や親としての心づかいについて話すことが必要である。監督はワード部の会員と，上役は部下と，心に思っていることはどんなにおっくうで，困難に見えようと分かち合うことが大事である。そしてそれは，今しなければならないのである。それをひきのばすことは，ますます人間関係の発達を逆方向にもってゆくことになる。

2 **「信頼」**権威ある人は下にある人に対して強い信頼感を持つように努める必要がある。親は子が正しい判断ができると信頼し，子にその機会を与えるべきである。心配性の権威者は，他の人が誤りを犯すのではないか，ちゃんと仕事をしないのではないかと恐れ，点検し見回りあたりをうろつくので，ついには，下の者は自分がくつひもを結ぼうとする6歳の子供のような気がしてくる。

ジョセフ・スミスがどのように末日聖徒を指導してゆくのかと聞かれたとき，こう答えられた，「私は人々に正しい原則を教え，人々は自らを治める。」（ジョン・テイラー，説教集10：57～58）相互依存の土台となるのは，正しい原則を教えることである。それこそ権威ある人がすべきことである。原則を教えたあとは，他の人が運用し，自分自身を治めるのを信頼しなくてはいけない。権威者に統制，支配されるのではなく，権威者と共存するのである。

3 **「心を開いた交わり」**大切なことは，心をわって知っていることを話し合うことである。対話には，話し手と聞き手があり，両者の間には意志の疎通がある。相互依存するためには，上の者も下の者も互いに話し聞く機会を持たなくてはいけない。それは，決して上の者が話し他の人がいつも聞くというような一方通行であってはならない。考えや感情を分かち合うことがコミュニケーションには必要である。ほとんどの話題，問題に関し人々は感情とともに，考え，意見主張を持っている。本当に理解し合うには，両者が知っていることを話し合わなければならない。

多くの親は，子供と愛情や意見を分かち合おうとしないものである。指図したり，注文をつけたり，命令したりするのは，分かち合うことではない。最終的決定を下す前に，まず話し合いをし，心を開いて考えや感情を分かち合う過程を経る段階においてよい結論がもたらされる。

結論を出す前に権威者は次のように言うべきである。「私はあなたが，話題となっている問題について，何を考え，どう感じるかを知りたい。私は心から意見を聞きたい。正直で率直に言ったからといってあなたを批判したり罰することはしない。私たちがテーブルに方法を置いた上でもしお互いに関心を持ち合い，互いに信頼しあうなら，みんなに満足のゆく結論が出るだろう。」

4 **「一緒に導いた結論」**相互依存では，関係者が皆互いに理解し全員が満足し，喜んで支持するような決定を，共同作業で導き出すことが要求される。そのようにして得た結論は，それぞれがあらゆることに等しい役割を果たさねばならないような平等でなくてもよい。ある時は父親は息子にこう言うであろう。「お前は私より車に詳しいんだから，お前に任しその通りにするよ。」またある時は息子は父親に同じようなことを言うであろう。しかしある時には互いによく聞きあい両方が満足し，やりとげられる結論を導きださなくてはいけないだろう。

5 **「共同作業」**相互依存は共に働くことを意味する。決定したことを実施するには人々がいっしょに働くことが必要である。親が子供になすべきことをいいつけるだけの家庭があまりに多すぎる。

親はいいつけられたことを子供がするまで抑えつけ，命令し，罰する。チームを組んでやった喜びを皆が体得し共同で物事をやりとげられるような仕事を計画し実行することが，あまりにも少なすぎる。

時としてその仕事は一人の努力で事足りるかも知れないが，互いに分かち合えばもっと満足のゆくものになろう。もし権威者が自分の地位や「イメージ」を気にするのなら，下の者といっしょに働くことを避けようとするかも知れない。しかし，ますます多くの指導者が聖書の言葉が真実であることを知らされている「そこで，あなたがたのうちでいちばん偉い者は仕える人でなければならない。」（マタイ23：11）

われわれは反抗する若者がどうなるか，社会の中で身近に見ている。彼らは権威者に反感を持っているか，または，どのようにして権威者と共に働いていくかその方法を学んだことがないかのどちらかである。問題解決や，労苦を共にする訓練は家庭で教えられねばならない。これは子供の好き勝手を許すことでも，子を服従させて親の気まぐれを実行することでもない。それは愛と思いやりと信頼に基づいて，相互に努力しあう状態である。

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長

エディス・S・パトリック

今から94年前のこと，ある美しい母親は３人のかわいらしい娘に恵まれていましたが，どうしても息子をほしいと思っていました。彼女は天父を心から愛しており，お祈りは必ず聞きとどけられることを信じていました。そして息子を授けて下さったなら，父親と天父の誉れとなるように息子を助け，なんでもできるかぎりのことをしますと主に祈りました。そして４番めに男の子が生まれ，赤んぼうを抱いたとき，その子が特別な子供であることをはっきり知りました。彼女の祈りがかなえられたのです。子供は父親の名をとってジョセフ・フィールディング・スミスと名づけられました。そして彼は，多くの方法で，特別であることを証明したのです。

ジョセフはごく普通の学生でしたが，読み書きを初めて学んだ時から読書と勉強が大変好きでした。10歳になるまでに，２度モルモン経を読みとおしました。父はたびたび伝道に召され，ほとんど家にいませんでした。ジョセフと弟たちは家畜や農園，果樹の世話をして一生懸命働きました。その頃には非常に大家族になっていたので，家事の手伝いももちろんしました。姉２人はニューヨークの学校に行っており，ジョセフは母親を手伝ってパンの焼き方も覚えました。秋には多くの人や男の子が冬に備えて肉をとりに狩に行きましたがジョセフは決して行こうとはしませんでした。野生の動物といえども，殺すことができなかったのです。

お母さんは医者で，よく真夜中によばれました。病人がいるとき馬を小さな１人乗りの馬車につなぐのはジョセフの仕事でした。当時は電話も自動車もなかったので，男たちは馬や自転車や，またしばしば何マイルも歩いて呼びにやって来たものです。スミス姉妹はいつも呼ばれ，喜んで人々を助けました。

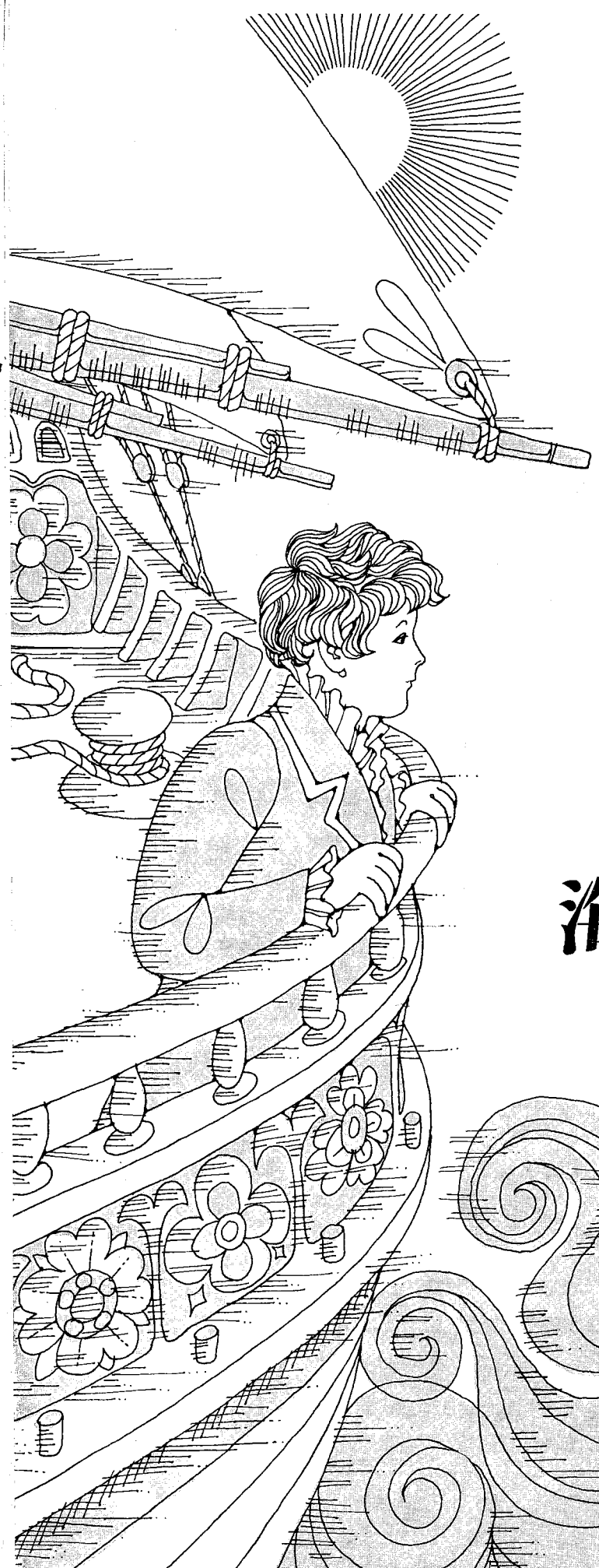
ジョセフは大変若くしてイギリスに伝道に行き宣教師の仕事を喜んで務め，福音の原則を知らない人に教えることを非常な喜びとしました。

帰国後，若く美しい学校の先生と結婚しました。のちに使徒に選ばれましたが，これはお母さんにとって驚くべきことではありませんでした。息子が主の仕事のために準備されていることを知っていたからです。お母さんはまた息子が選ばれたとき，主が兄弟たちに霊感を与えたことを知っていました。

60年以上時間と才能を主のみわざに捧げてきました。多くの務めに加えて，彼は11人の子供のよき父親でありよき手本でもあります。彼は子供たちを心から愛し自分の子供たちが神の子であり，いつか再び天父に会うよう準備するため正しく教えられなければいけないことを知っています。

ジョセフ・フィールディング・スミスは，末日聖徒イエス・キリスト教会の予言者，聖見者，啓示を受ける者として現在支持されています。全人類への彼の愛は限りがなく，何が最大の望みかと聞かれれば，人々が神の戒めを理解し守って生きていけるよう助けることだと答えるに違いありません。大管長は福音に従って生きてこそ世界で一番の幸福を得られることを知っています。

スミス大管長は７月19日に95歳の誕生日をむかえます。世界中のプライマリーの子供は大管長に「誕生日おめでとう」をいいましょう。



海の嵐

アイリス・シンダーガード

ジェイソン・C・ジョンズはハッチをのぼって船のかんぱんにでました。太陽の光で海はキラキラと輝いていました。彼は上の方にはられた大きな帆を見上げました。ふつうなら，朝日で帆は金色にそまるのですが，けさは雲が出て，太陽の光は帆をとおってきませんでした。

ジェイソンはかんぱんにくくりつけてある移住者の箱やたるのまわりを歩きました。友達の一等航海士のウィリアム・バクスターをさがしていたのです。

イギリスのリバプールから船に乗ってすぐウィリアムはジェイソンに「末日聖徒といっしょに航海できるなんてうれしいよ。水夫ならだれでも，聖徒を運ぶ船は難破しないことを知ってるからね」といって，かた目をつぶってみせました。

長い航海の間，ウィリアムはジェイソンに船のことをいろいろ説明してくれました。どのように帆が動くかを教えてくれたり，また『ジブ』とか『スティセイル』とよばれている三角の帆を上げたりおろしたり，ジェイソンにさせてくれました。

また，船長が六分儀を使って何をしているのかもジェイソンに教えてくれました。「船長はね，海を渡っていく道を見

つけているのだよ。海の上には道路なんかないからね。ぼくらの道しるべとなるものは，道とはよべないからね。ぼくたちは，太陽や星でかじをとらなくてはいけないんだよ。」

けさ，ジェイソンは手すりにもたれて海面を見おろしていましたが，恐ろしくて手すりにしがみつきました。今までにそのような高い波を見たことがなかったからです。海はまるで大きな緑の山のようにおしよせてきて，波と波の間はまるで深い谷底のようでした。船は木の葉のように波にもまれました。ジェイソンは立っているのさえせいいっぱいでした。彼は恐くなりました。

風はますます強く吹きはじめ，十文字にはってある四角い帆は風をはらんでちぎれそうでした。みんなは船倉で夜をあかしたあとしんせんな空気を吸いにデッキに出てきて，風の強いのにおどろきました。ジェイソンはパーキンス夫人が風でスカートがめくりあがらないようしっかりおさえているのを見ました。ウイルソンさんの長い白いあごひげは風でピンとなっていました。その光景を見てジェイソンはおそろしいのも忘れて笑いだしました。

その時，ジェイソンはお父さんがブラウン船長の方に行くのを見て，あとについて行きました。「ジョンズ長老，皆を大いそぎで，下におろしなさい。風が強いから。」

ジェイソンのお父さんは両手で黒い帽子をもって，ハッチへ人々をもどすように指示しはじめました。ジェイソンはウイリアムが，かんぱんをいそいでやってくるのを見てかけよりながらさけびました。「何かできることはありませんか」

ジェイソンはウィリアムが教えてくれた，たくさんの事を考えました。以前，２人でそうじゅう室に行った時，ウイリアムはジェイソンにひとりでかじをとらせてくれました。大きな木のかじをとって，自分の手で大きな帆装船が動いていると思うとジェイソンは，王様にでもなったような気分でした。

今や船はきけんな状態にありました。当然船に乗っている人もです。ジェイソンはソルトレーク盆地の新しい家に行くためイギリスを離れた老人や，子供づれの夫婦のことを心配しました。子供たちの中には，おとどい生まれたばかりの赤んぼうもいるのです。

ジェイソンはウィリアムが叫ぶのを聞きました。「そこの綱をもってくれ。帆を巻きあげるのを手伝ってくれ」。

ジェイソンはグラグラと傾いているデッキを歩いて行き，ロープのはしをいっしょうけんめいひっぱって，水夫が帆をおろすのを手つだいました。つよい風がまともにジェイソンの服にあたり，大つぶの雨もふり，ジェイソンは寒さと興奮でガタガタとふるえました。

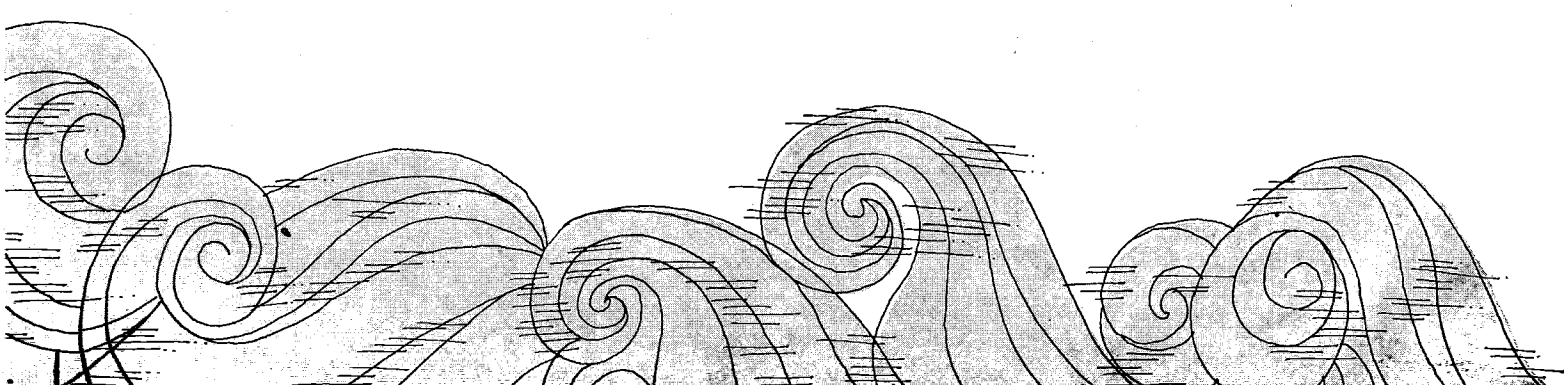
ブラウン船長はかんぱんの前の方に足をひろげて立って上の方を指さしていました。

ジェイソンはこんなひどい嵐の中で，水夫があんなに高い綱の上に登って帆をおろすなどとても信じられませんでした。大きな帆がはためき，船は逃げだした馬のように跳びはねていました。その時，ジェイソンは，水夫はみな，船長の命令に従わなくてはいけないのだということがわかりました。船の安全がそれにかかっているのです。

ブラウン船長は，ジェイソンの肩をもってさけびました。「行ってお父さんに，特別なお祈りをして下さいと伝えなさい。」

ジェイソンは暗やみの中をはうように，ハッチをおりて行きました。このような嵐の中ではろうそくは使ってはいけないのです。かんぱんの下には400人以上の人々がいるのですが，風のうなる音と水がくだける音のほかは，何も聞こえません。そのとき，ジェイソンはお父さんを見つけました。お父さんと何人かの人がひざまずいて輪になっていました。ブラウン船長がたのんだお祈りがもうされているのだということがわかりました。

ジェイソンはかんぱんにもどりました。ふりかえると水夫がはるか上の方でマストに十文字にこうさしている木の棒に



ぶらさがっているのが見えました。水夫は，帆を棒につけようと必死でした。いったいどうやって，水夫たちは，風にとばされないよう，はためく帆布につかまっていることができるのでしょう。とうとう帆がしっかりとめられ，水夫がひとりずつ，ロープをつたってかんばんにおりました。

突然ジェイソンはツルッとすべりました。船が横に傾きはじめました。船はどんどん，しずみました。ジェイソンはもう2度と船が浮かびあがらないのではないかと思いました。大波がかんばんをザブーンとあらって，緑色の水がジェイソンにおそいかかりました。ジェイソンは息ができなくて，くるしくなりました。ゆっくり船がまた水平にもどりました。

目に入った海水をぬぐいながら，ジェイソンはあたりを見まわしました。ブラウン船長がじっと立っていました。水夫も立っていました。みんなの系は恐ろしさでこわばっていました。しかし，荒波はおさまりはじめてきました。うなっていた風がおさまり，マストのきしむ音が小さくなっていき，赤んぼうの泣く声もデッキの下から聞こえてきました。

ウィリアム・バクスターはおごそかに言いました。「嵐がおさまった。」

ジェイソンのお父さんと他の2人がデッキに上ってきました。ブラウン船長はお父さんたちの所に行き，手をさし出していいました。「30年間航海していますが，ひどい嵐がこんなに早くおさまったことは今までにありませんでした。そして，おごそかにこうつけ加えました。「大いなる主よ」

若き日のジョセフ・スミス

ジェームス・アレン氏はジョセフ・スミスの生活やその時代のことについて特別な関心をいだいているＢＹＵのアメリカ史の教授である。ニュー・エラ誌は歴史関係教授委員会とジョセフ・スミスの青年時代について知りたいと思っている高校生と大学生のグループを集めた。これはその結果である。

1825年12月23日 明るい茶色の頭髪と青い目をした180㎝もあるハンサムなアメリカ青年が20回目の誕生日を祝っていた。彼の名前はジョセフ・スミス・ジュニアといった。

二十才の青年にとってこの二十代は生きることに魅力を感じる時期であった。合衆国では，のちにジョセフがアメリカで最も偉大な指導者であると称讃したアンドリュー・ジャクソン将軍が大統領選挙の第一線から退いていた。エリー湖の運河が開通され，その結果運河の開通は綿繰り機が発明されたこととあいまってアメリカの経済発展上重大な要素となった。

南アメリカではスペインから独立した最後の共和国が独立一周年を記念して祝っていた。ロシアでは，ニコラス一世がロシア皇帝になり日本では，外国の干渉を避けるよう警告していた政府が外国人を全部追放していた。

ジョセフの住んでいた社会は，今とはずいぶん異なっていた。しかしながら，彼の個人的な行動や問題は1970年代に住む若い末日聖徒たちと同じようなものであった。各世代を通して，ジョセフの若い頃と私たちの生活がどのように似かよっていたかみてみよう。

二十才になるまでに，この予言者は人が後にも先にもしたことのないことをすでにいろいろと行なっていたのである。この予言者は天父と御子にまみえ親しく言葉をかわしたのである。彼は天使と語り合い，後にモルモン経に訳された古代の記録を見，これに触れるという経験をしていたのである。

しかし，ジョセフ・スミスは完全ではなかったし，克服すべき点をもっていた。その欠点の一つは字の書き方であった。すなわち彼の母親が言っていたように，ジョセフの書き方は家族の中で一番へたであった。また十代の頃の彼は時おり，白昼夢とよばれる深い物思いにふけることがあった。それで彼は少し怠けるという，評判をたてられていた。

青年ジョセフは誘惑に超然としていたわけではなかった。彼が書き残した書物の中に述べているように，最初に示現を見たあとでさえも，彼はさまざまな種類の人々と交際したことを次のように述べている。「度々愚な誤ちに陥り，若気の弱さと，人間のおろかさとを示した。そして遺憾ながらこれらのことは，神のお目障りとなる種々な誘惑に私を誘いこんだ。」（ジョセフ・スミス２：28）しかし彼は「大罪かまたは憎むべき罪悪」を犯すことはなかった，なぜなら自ら語っているようにジョセフは「このような罪を犯す性質は生来決してなかった」からであった。しかし，彼は生来陽気な性格を持っていたので時おり「軽卒な行動」をとった。それで彼は度々「自己の弱さと不完全さ」とに責めを感じることがあったが，十七才になるまでに，彼は非常に悪いことだと思っていた不完全な点を克服するために内に強い心を求め，また神の許しを得るために熱心に祈り求めた。

ジョセフは，自己の判断力と正しい知識によってますます成長した。これは彼が二十才になった自分の雇い主に銀山の発掘を止めさせることができたことに表われている。ジョセフは月14ドルでジョサイヤ・ストールに雇われ，ニューヨーク州で多くの人々を使って，ストール氏は銀山の発掘に励んでいた。しかしジョセフは次のように述べている「私は引きつづきこの仕事に一か月近く従事したが，私たちの事業は不成功であったからついに私はこの老紳士を説いて銀山発見のための発掘を止めさせた。私が銭掘りの山師であったと現にひろく世に行われる話はこの事から起ったのである。」（ジョセフ・スミス２：56）

予言者になってからでさえも，若いジョセフは多くの問題や誘惑それに世間一般の若者が持つ関心事等を経験したのである。この頃ジョセフはあらゆる年代の人々にあてはまる生命の原則すなわち悔い改めと許しとを学んだ。

あいにく若かりし頃のジョセフは日誌というものをつけていなかったし彼の名前は当時の新聞紙上に載ることもなかった。また彼のことについての情報が雑誌の記事になることもなかった。それで現

在，我々がジョセフ・スミスの壮年時代がどのようなものであったかを知るには，ジョセフの母親や知人の回想あるいはまたその当時の一般的な社会情勢から知るしか方法はない。

ジョセフ・スミスがまだ九才になったばかりの頃，一家はバーモントからニューヨークへ移り住んだ。スミス一家はほかのニューイングランドの人々と共によりよい農場と採算があう土地を求めてニューヨークに住むようになった。スミス一家が手に入れた新しい農場（約百エーカー）は一面木々で覆われていたので，少なくとも最初の一年間は木を取り除く作業に費やされたにちがいない。

スミス家には八人の子供がいたが当時八人もの子供を養うのは楽ではなかった。若いジョセフは両親が負債を負っているいみをよく理解していた。また彼は一家を支えるために働くことを通して，人々に頼られることがどのようなものであるかがわかった。

ジョセフは兄弟たちと共にニューヨークの父の農場でうっそうとした木を取り除く仕事を手伝ったとき木の切り方を覚えた。立ち木は「帯しめ」という方法で処理された。これはすなわち樹皮を輪状にはぎとって立ち木を枯らす方法であった。開拓者たちはこの枯れ木を燃やし，時おりできた灰で木灰やカリ，真珠色の灰を作ってこれを売っていた。「帯しめ」の方法を用いない場合は生木のまま斧が入れられた。ニューヨーク西部はカエデの木が多いところでこの木を切り出すのは容易なことではなかった。

スミス家の農場は小麦を作るのに適していた。スミス家が小麦を作るのに成功したら，ほかの開拓者たちもできるだけ早く小麦を作ろうとしはじめた。

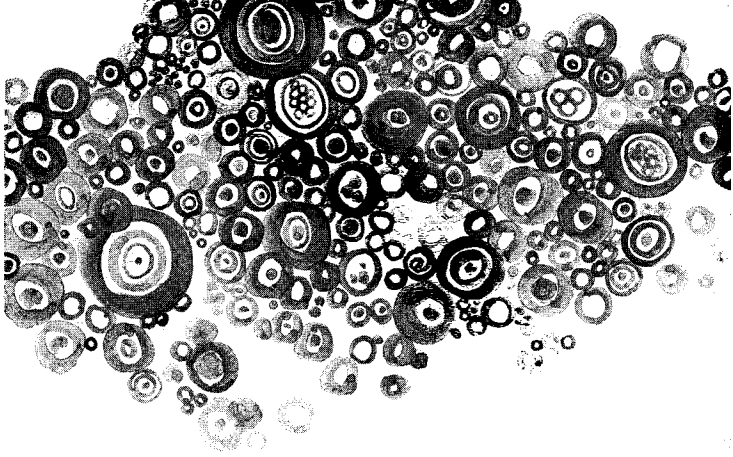
新しい農場が小麦を作るのに適しているといっても十人の家族の生活費を即刻まかなうことはできなかった。それでジョセフと兄弟たちは自分たちがやれるいろいろな小さい事業を捜し始めた。母親が描いた油絵を家族みんなで一軒一軒売り歩いた。

スミス家がこの農場に移ってくる前に住んでいたパルマイラで，ジョセフの父親はケーキとルートビア店を開いてジンジャーブレッド，パイ，ゆで卵その他いろいろな品物を売っていた。たまには自家製の手押車に商品を積んで一軒一軒売り歩いていた。そしておそらくジョセフもこれを手伝ったにちがいない。

後になってジョセフは自家製のいすやかご，カバの木で作ったほうきやメイプルソース，それにたきぎも売りに出かけた。スミス家の人々は祝日や市など人の集まる所に出かけていってケーキやルートビアを売った。

大きくなるとジョセフは小麦畑をたがやしたり井戸を掘ったり，岩を取り除く仕事をみつけて家を離れた。ジョセフを雇っていたある人はジョセフについて次のように語った。「ジョセフのりっぱなふるまいや忠実さそれに親切な応対ぶりは彼の友人や知人たちの尊敬を必ずといっていい程受けていた。青年らしいスポーツや娯楽をして遊ぶとき，ジョセフよりもひいでていた者はいなかったし，彼はいつでも他人の善意を大切にしていた。」

ジョセフ・スミスは若い頃，仕事や苦労ばかりして過したわけではない。彼の母親に言わせればジョセフはよく黙想にふけっていたということである。彼はまた身のまわりに起こる事に強い好奇心を示した。これはたぶん黙想のじゃまになったことだろう。彼があまり一生懸命目を近づけて印刷をしていたのでいたずら好きの青年から真黒いインクを顔に塗られたことがあった。一方彼は陽気な性格でユーモアのセンスがあった。りっぱなおとなになってからも罪の



ない冗談を言ってはよく楽しんでいた。

青年ジョセフはスポーツや野外活動が好きだった。[illegible]をみつけてはゲームや遊びに加わりまたこれにひいでていた。アメリカの開拓者たちの社会ではレスリングや徒歩競争，跳躍競争，棒引きなど技能や力の強さを競いあうあそびが若人の間で人気があった。ジョセフはこれらすべてをうまくこなしていました。

「綱引き」とは二人が向かい合って足をそろえて座り，二人の間に入れられた棒を手で握って引っぱり合うゲームである。相手側から棒をひっぱり取った者が勝ちである。技術もさることながら身長が大きかったので，ジョセフは棒引きやレスリングで負けるようなことはめったになかった。彼はまた魚釣りも好きだったのでパルマイラ近くのダーフィの水車池でよく釣りをしていた。彼は猟も好きだった。それでおとなたちと同じように犬と銃を持って森の中を何時間も歩き回った。

よその農場の青年たちがそうであったように，ジョセフも学校へ通う機会などなかった。学校といえば，まだ子供の頃，法律で公立学校に通うよう開拓者集団に対しても要求していたバーモント州で小学校に通ったぐらいだった。ニューヨークに，公立学校がなかった。だからといってスミス家には子供たちを私立学校に通わせる余裕はなかった。

スミス家の隣人たちの話によると，スミス家では冬の夕べに家庭で学校のようなものを開き，聖書について話し合っていたということである。この時，ジョセフは読み書き算数の基礎を勉強した。彼はまた雄弁な演説家になるように勉強し，地方討論会の活発な会員だった。その後，国語や歴史，科学，政治を勉強して，次第にりっぱな教養を身につけるようになった。

普通の若者と同じようにジョセフも異性に興味をもつ年頃になった。彼が交際した二人の女性はパルマイラから40マイル離れたところに住んでいたジョサイヤ・ストールの娘たちだった。ジョセフは二十才になる少し前，彼女たちの父親のところへ働きに行った。どのようなデートをしていたかこれに関する資料はないが，もし西部開拓者たちが行なっていたとおりにしていたとすれば，ダンスよりも人気のある娯楽はほかになかったため，ダンスに興じていたのであろう。

最も一般に踊られていたダンスは，速いテンポで，輪になってみんなが回るあのバージニアリールであった。家庭ではよくパーテーが開かれていた。若者たちは一緒に集まっておいしい食事をとったり，ダンスをしたり，客間でできるいろいろなゲームをして楽しんだ。ある開拓歴史家は次のように記している。すなわち「これらのゲームの多くは主要な目的に則していたので，ゲームは望みを達成するのに最も効果があった。」

青年ジョセフも交際を楽しんだにちがいないが，彼が女性に対してとった行動は模範的なものであったことは明らかである。数年後ジョセフの過去に何か悪業を見つけ出そうとしていたある人々は彼女たちから何かを聞き出そうとして，ストール姉妹に言い寄った。しかしながら，人前でも個人的にも二人に対する彼の態度は健全であったと二人は述べた。

ジョセフ・スミスは陽気で善良な性格の持ち主であったが，同時に自分と他人の個性を大切にしたいとたえず心に留めていたので，若い女性につき合っていることを後悔させるようなことはしなかった。

ジョセフがまだジョサイヤ・ストールのところで働いている頃，彼は特別な若い女性に出会った。この女性こそその後間もなく妻となったエマ・ホールであった。彼女は猟師とアイザク・ホールの娘でジョセフはこの家に下宿していた。エマはベインブリッジの町にやって来たハンサムな青年よりも十七か月年上だった。やがてこの二人は深く愛し合うようになった。

しかし，二人の恋は問題に遭遇した。その問題というのはエマの父親がジョセフの経験した示現や啓示の話を心配し出したことである。ジョセフ・スミスをよく知らなかったので，ホール氏の疑惑は当然のようにつのり，それで二人の結婚に反対した。しかしながら二人は心から愛し合っていた。それで二人は結婚するにはかけおちをするしかないと決心した。ジョセフが二十一才で花嫁は二十二才だったので二人とも承諾なしで結婚できる年令だった。それで二人は1827年1月18日に結婚した。

この点において，ジョセフ・スミスの青春は今日の若い男女のそれと似ている。世界中の高校生や大学生は自分たちの将来ばかりでなく，自分たちをとりまく社会の将来にも関心があることを主張している。戦争・犯罪・環境破壊等は思慮深い学生たちに人生の意味について模索させる原因となっている。

人生の意味とは何だろうか。そしてどこに絶対的真理を見出せるのだろうか。

ジョセフ・スミスの時代の問題や論点は現代のそれとは異なっていたが，真理を追求するというジョセフ・スミスの精神は現代の若者のそれと同じであった。ジョセフは黙想好きな性質と好奇心それに読書に対する関心により，また周囲の混乱から心を動かされた。ジョセフが十代になったころ，ニューヨーク西部では宗教に関する最も劇的なできごとが起こった。「二度目の偉大なめざめ」はこの国，特に西部にも広がり，ほとんどの人は諸教会に属していなかったが多くの人が信仰復興運動に加わり，それがその地方全体に及んだ。

ジョセフ自身は単に好奇心どころではなかった。人生の意義すなわち真理を追求するようになった。十二才の時，彼は当時の社会の影響を強く受けて，自身の幸福ということに関心を持つようになった。それから二，三年の間，聖書の勉強に精を出して，人類全体の幸福にも関心をもつようになったのである。その結果，祈りによって主に求めようと決心した。神に祈り求めた結果，ジョセフは最初の示現を受けたのである。

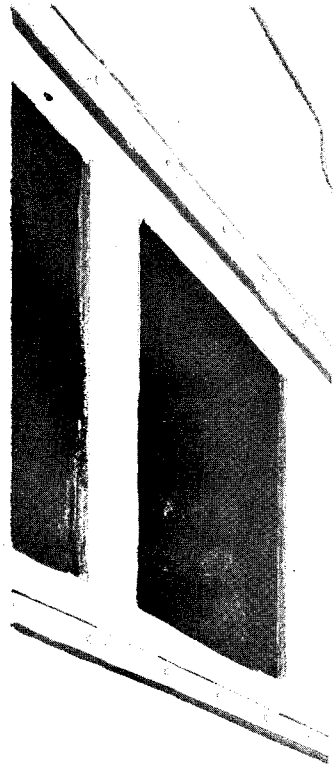
ジョセフ・スミスの青年時代にもいろいろな面があり，これは今日の青年の経験や問題といろいろな方法で比較できる。彼が住んでいた世界はわれわれのそれよりも小さかった。それで社会から直接的な影響を受けた。ジョセフは働き遊んだ。また時には座り込んで考えにふけった。彼は大望を抱いていたが，時には間違いも犯した。ジョセフはほとんど学問をおさめていなかったがそれ以上に必要なものを知った。

ジョセフ・スミスは多くの青年が経験する誘惑に耐え，許すことを知った。一青年としてのジョセフ・スミスは，その健全さとつりあいのとれた人生をもって，またさまざまな問題や障害を克服することによって教会の若い会員たちに模範を示したのである。

ジョセフにできたとすれば，私たちもできるはずである。

神との歩み

カーラ・サンソン



これは戦時中十代だった著者の体験談である。

1945年3月のあの日に召集令状を手にした時，私はぞっとしました。敗戦はもう目に見えていました。みんなそう噂していました。それなのにハンブルグに住む私がまだ十代というのに故郷の近くの空軍基地に三日以内に出頭しなければなりませんでした。そこからチェコスロバキヤの中央部にある基地へ行くことになるのでしょう。

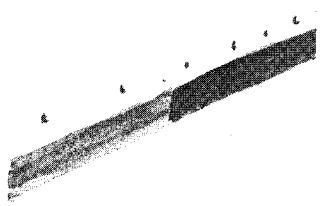
両親は涙を浮べながら別れのキスをしてくれました。両親は息子が二人ありましたが，一人はロシヤに，もう一人は落下傘部隊でどこへ行ったとも知れず，二人からの音信は全くありませんでした。

「私たちには神を信じることしかない。いつも神様にお祈りすることを忘れちゃいけないよ」父は言ってくれました。

私は胸が一杯でした。もう二度と両親に会えるかどうかわかりません。危機が迫っていました。汽車は爆撃と機銃掃射を浴びており，私が基地まで無事に行けるとしたら，それは奇跡としか思われないような状態でした。でも私は着きました。それは長い長い旅でした。

私がチェコスロバキヤの基地に着いた時，私を見た白髪の主計官は絶叫しました。「とうとう子供を送り込む所まできたのか。お前さん，どうしてお母さんと家にいなかったのかね。ロシヤ軍がすぐにもここに攻め寄せてくるのを知らんのかね。それに，お前さんがここでできる仕事なんかありゃあしないんだ。」

ロシヤ軍は目前に迫っていました。これはドイツ人の避難民が続々と基地の町を通り抜けていくことでわかりました。私たちは避難民に一夜の宿を提供しなくてはなりませんでした。三週間もの間，荷車に乗りあるいは歩いて，腹をすかし，病気にかかり，死ぬほど疲れ果て，ロシヤ軍の大砲への恐怖を目に浮かべながらやって来たのでした。ある人々は靴をはいていませんでした。彼らははれあがったくるぶしに麻布を巻いて，東部の積雪地帯をかきわけて来たのでした。また赤ん坊は泣き通しでした。私たちは全力を尽して助けようとはしましたが，将校はこのような非常事態に備えていなかったのでした。



4月になると，東部の雪がとけ始めました。まだ寒さはやわらいでいませんでしたが，春のいぶきが漂っていました。ある日のこと，私はあの老主計官にすみに呼ばれ，彼は興奮を押えた様子でこう言いました。「たった今ロシヤ軍が迫っているという通知を受けた。お前さんがハンブルグに帰れるよう必要書類を揃えておいた。お前さんは始めからここに来るべきではなかったんだ。ロシヤ軍の捕虜になりたくなかったら，今日発ちなさい」

私はプラハ行きの最終列車に間に合いました。空いている所といえば，最後部のデッキぐらいのものでしたが，そこもチェコ人やスロバキヤ人で一杯でした。この人たちは私がドイツ人であるということを知っているのかしらと思いました。や

サンソン姉妹はドイツのハンブルグで末日聖徒の両親から生まれ，第二次世界大戦で劇的な出来事を経験した。彼女の息子は現在西ドイツで伝道中である。ケネス・サンソンの妻である姉妹は，現在パシフィックパリセーズ（カリフォルニア州）ワード部で福音の教義クラスを教えている。

Glen S. Hopkinson

がて汽車が動き出し，私は回りの人たちの顔を見まわしましたが，だれも私を見ようとはしませんでした。私は体をくねらしてすみの柱の方へ行こうとしましたが，チェコ人の百姓の重い長靴はかかとの幅ほども動かず，かえって私の顔や首すじにニンニクの息を吹きかけられました。

汽車はここかしこに停車しながら，ごとごとと進んで行きました。夕闇が迫る頃でしたが雪の反射で外はまだとても明るくなかなか暗くなる様子もありませんでした。チエコスロバキヤ人はめったに口を開かず，ただ目で合図をするぐらいでした。たった一度何か言いましたが，それはとても早口で興奮している様子でした。けれども私の方に目を向けているのに気づきました。突然私は非常にゆっくりデッキのはしの方へ，まさしく線路の上へ落とそうとして押されているのに気づきました。私は死にもの狂いでにらみつけましたが，彼らは石のような冷たい表情をくずそうとはしませんでした。私はやっとわかり出しました。彼らはこの疾走する汽車から私をつき落して，もう一人のドイツ人をこの世から抹殺しようかどうか話し合っていたのでした。このように混雑した汽車では，あたりまえの事故に見えることでしょう。よくあることで，だれもおかしいとは思わないでしょう。

私は恐しい顔をした百姓の青年の目にくぎづけになりました。その青年の目は，「お前はドイツ人だ。言い訳は聞きたくない」と言っているようでした。

私は柱にしがみついて，敵でない人を捜しました。みんな私を見つめていました。すると突然汽車が不意に停車し，全員が倒れそうになりました。私はよろめいてある人の胸にぶつかりました。強い手に腕をつかまれて，一瞬支えられました。私は陰気そうな大柄の男の人の目を見上げて，「ありがとうございました」とチェコスロバキヤ語でつぶやくように言いました。（私は単語を10ほど知っていました）けれどもその人は私を見ようともしませんでした。

ちょうどその時，反対側の線路を軍用列車が大きな音を立てて通りすぎて行きました。見ると，戦争に疲れたドイツ軍の歩兵がぎっしりつめられて，ロシヤ戦線に急行しているようでした。チェコスロバキヤ人たちはその列車の最後の車両が通過するまでじっと見守っていました。そして，相好をくずしてにやにや笑い始めました。ドイツ兵のつまった列車は間もなくロシヤ軍の大砲のえじきとなることでしょう。チェコスロバキヤ人はもう私のことなどかまわなくなりました。

プラハの駅は大混雑でした。興奮した面持ちの人々が通り過ぎて行きました。ドイツ軍の駅に問い合わせると，ドイツに向かうのは戦闘列車しかないということでした。

私は恐怖にかられました。「どうしよう。」答などありませんでした。ロシヤ軍が間近に迫っているのでした。私は大声で神の助けを祈りながら，プラットフォームの間を走り続けました。

突然，軍用列車の窓からドイツ語で，「お嬢さんどこへ行くんだい」という声が聞こえました。

「ドイツへ帰らなければならないのですが，どうしたらよいかわからないんです。汽車がないんです。」私は叫ぶように言った。

「ここにあるよ。おれたちがあんたをかくしてあげよう」

私の手をとろうと８本か10本ぐらいの腕が伸び，私は窓から引っぱり込まれました。列車は男たちで一杯でした。「まあ乗心地は良くないだろうが，いつでも一人ぐらいは余分に乗れるんだよ」と一人の兵士が言いました。

「どこにいらっしゃるの」と不安げに尋ねますと，「おれたちにはわからん。だが，ここを出ることだけは間違いないね。」

兵士たちは窓ぎわの狭い場所をあけてくれました。もしそうでもしてくれなかったら私は窒息してしまうところでした。もし列車がとまったら，軍服の下にかくしてくれると言ってくれました。列車は何度もとまりました。連合軍の飛行機が襲来するため，列車はトンネルの中や森のかげにかくれなければならないのでした。しかし何の命令も出なかったので当座は臭いを放つ軍服の下にかくれずにすみました。

ドレスデンの郊外まで14時間以上もかかり，ドレスデンの駅が爆撃を受けて破壊されていたため，補助駅まで戻らなければなりませんでした。行けども，見えるのはただ焼け跡とがれきばかりで，これがかつてバッハやモーツアルトの住んでいた町とはとても思えませんでした。

ドレスデンで私は再び一人ぼっちになりました。混乱はひどいものでした。赤十字の人たちがけんめいに負傷者や子供の世話をしていました。また軍用車が目まぐるしく疾走していました。だれかと話をすることなどとてもできませんでした。

「焼け跡にかくれろ。すぐまた爆撃があるぞ」とだれかが私に叫びました。

また非常な絶望感に襲われました。「どうしたらいいの」私はあてもなく歩きながら祈りました。

すると妙な感じがしてきました。目に見えないけれど愛のこもった腕が私の肩を抱いているような感じでした。私はそれを非常に強く感じました。数分後，一台の軍用トラックが私のそばをかすめて通って行き，急にとまったと思うと私の所まで引き返してきました。

「お嬢さん，乗るかい」

「ええ，ええお願いします。運行している鉄道の駅へ行きたいんですけど。」

「お乗り。見つけてあげよう。」

それは奇跡としか思えませんでした。突然プラットホームと線路と汽車が現われたのです。

「これは軍用の駅ですか」と私はプラットホームを歩きながら，大尉に尋ねました。

「そうだよ。君はこんな所で何をしているのかね。」

私はあの書類を見せました。大尉はやさしげな目で私を見て，「信じられない」と言いました。「我々の国は一体どうなっているのか。ここで待っていなさい」とやさしく言うと将校たちの所へ歩いて行き，少し話し合った後，私に来るように合図しました。

カーラ・サンソン
15才当時の写真

「私たちはこれからベルリンへ行く。知っての通り戦闘だ。ロシヤ軍がポッダムに迫っている。君は列車に乗ってよろしい。責任をもとう。」

私は再びすし詰めにされました。今度は立ったまま乗らなければなりませんでした。時には片足で立っていたこともありました。それはとても苦しい旅でしたので，今でも本当に耐えてきたとは信じることができません。一人の兵士が古いパンを少しくれましたが，それはケーキのようでした。それは三日目にやっと口にした食物でした。食物をそれほどありがたく思ったことはありませんでした。私は静かに感謝を捧げました。

空は列車を捜す連合軍機で一杯でした。また森やトンネルの中で停車して待たなければなりませんでした。たびたび，列車は戻らなければならないこともありました。それはまるで私たちが出発した所へ戻っているような気さえしました。地平線上の至る所に火の手があがり，大砲の音がしきりに聞えました。

列車が終着駅に着いた時，私の足は感覚がないほどはれあがってしまいました。兵士たちは巣に火をつけられた蜂のように列車から飛び出しました。私たちは音を聞き分けられないほど騒々しい戦闘地帯の中にいたのでした。だれかに話しかけても無駄なことを知った私はあてもなく歩き始めました。疲れ果て，恐怖で身がつまされる思いでした。すると，その時，「ベルリンまで乗るかい。地下鉄の駅まで乗せてあげよう」という声を聞きました。その声はまぎれもない前に会ったあのやさしい顔をした大尉でした。

ベルリンに着いて私は地面を見ました。これは地球ではありませんでした。これは天地創造の最初の段階にある別の惑星でした。色や生気が消え失せ，すべての生物は地下鉄のトンネルにもぐっていました。そこにはおびえている大勢の人たちがいました。多くの人々の目に恐怖を読みとることができました。幼い子供たちの顔にさえ，生気がありませんでした。私はあてもなくさ迷いました。手に持っていたスーツケースをもぎとろうとする人がいましたが，私はその中に自分の命があるかのようにしっかり握って離しませんでした。

「ベルリンを発つ電車はまだありますか」と尋ねると「お嬢さんあんたは気でも狂ったのかね。ベルリンはロシヤ軍に包囲されているんだよ。あんたは，シベリヤへ行きたいのかい。」人々はかみつくように言いました。

私はもうあきらめようとしました。脱出する手だてがなく

それにすっかり疲れ切っていました。けれどもその時また私の肩を抱いてしきりにやってみさせようとする見えない手を感じました。まだ何本かの地下鉄が動いていることを知った時，私はレーター・バーンホフには行くまいと決心しました。他の方面に行くように強く感じ，次の電車に乗りました。北へ行くのか，西へ行くのか，南へ行くのか全くわかりませんでした。けれども地下道を出ると，真向いに以前鉄道の駅だった所を見つけました。くずれた石の中に汽車が停っていました。そして乗客は民間人だったのです。

「待って」と叫んで，汽車はすぐに出る気配もなかったのですが，私は疲れた足をひきずって走りました。

「お願い。この汽車はどこへ行くのですか」

「ハンブルグ」とだれかが答えました。

「ハンブルグ。ああ，ありがうございます。主よ」私は大声で祈りました。「ありがとうございます。」

赤ん坊を抱いた母親たちが私に席をゆずってくれました。魔法ビンからミルクをついで私の手においてくれました。この世はまだすばらしかったのです。

いらいらし，性も根もつきはてるような三時間の後，汽車は出発しました。もし，線路に爆弾が落ちたら。ロシア軍が完全に包囲したら。いろいろな惨事がいつでも起こり得る状態でした。

やっと汽車は郊外をのろのろ進み始めました。遠くで爆弾の落ちる音が聞えました。地平線に煙がなびいていました。この時も汽車はとまって，空に爆撃機や戦闘機がいなくなるのを待たねばなりませんでした。ハンブルグがまた空襲を受けたのではないかしら。私の家が爆撃を受けているのではないかしら。両親に何かが起こっているのではないかしら。けれども私は心の中で父と母をはっきり見ることができたので，きっと無事であるに違いないと思いました。

汽車はのろのろ進み続けました。普通の旅ですと一日もかからないのですが二日かかって，汽車はハンブルグの近くの小さな町につき，そこからは進みませんでした。

「エルベ橋は通れないぞ」と叫び声がしました。「ハンブルグへ行く人は歩かねばならんぞ。」

「どうやってエルベ川を渡る。」

「わりと小さな橋はまだ大丈夫だ。」

人々はグループに分かれて，元気なグループは弱っているグループを助け，子供や赤ん坊の世話をしました。人々はグループごとに散らばって進みました。

「溝や森にぴったりくっついて行けよ」だれかが後の方から叫びました。

私たちはハンブルグから25キロの地点にいましたが，この最後の旅が一番つらい旅でした。私は足をひきずって夢中で歩きました。私たちのグループは次第に小さくなりました。私のように遠くまで行く人はいなかったからでした。

エルベ橋は片脚を空中に，片脚を半分水につけて巨人のようにあおむけになって倒れていました。私は壊れてはいましたが，なつかしい町を見ると胸が一杯になりました。サイレンが二度鳴りましたが，幸い短時間で終わりました。最初は防空壕に，二度目は焼け跡にかくれる時間がありました。

なつかしいハンブルグに残されたものといえば，緊張と破壊しかないように思われました。戦争は大きな犠牲を要求していました。私の足ははれあがって靴をはけないため，手に持って歩きました。あと二，三キロで，わが家に帰れるのです。5，3，1，あと1丁で，私たちのつつましい街，ダンレルスベックでした。私は目をつぶって街角を曲がりとまりました。私は身震いしました。目をあけた時，もし何事もなかったのなら友達や近所の人がそこにいるでしょうか。けれどもとにかく目をあけなければなりませんでした。目をあけました。そこには月光を浴び影をおとしているあの煙突がありました。わが家はもとのままで立っていたのでした。

「主よありがとうございます。」

でも両親は無事かしら。胸が一杯になり，かけ出しました。

「聞こえて。私よ，あけてちょうだい。あけて，私なのよ。」

何の音もしませんでした。

「聞こえて。私よ。あけてちょうだい。」

すると突然，家の中から足を引きずって歩く音がしました。

「どなたですか。」父がドアをあけました。

「おお。カーラ，カーラかい。かあさん，かあさん，起きなさい。娘が帰ってきたんだよ。」

両親はドアのとこへかけ寄ってきました。

「夢かと思ったよ」母は泣き叫びました。私たちは抱き合い，キスし，わけもなくしゃべり，一度にわっと泣きました。私は家に帰ったのでした。

「私たちは日夜お祈りを捧げていたんだよ。それに近所の人たちもだ。みなさんで祈って下さったのだよ」と父が言いました。

私はあの目に見えない腕が幻想ではなかったことを知ったのでした。

テリオテマナとプナ

ドン・マーシャル　ジェーン・マーシャル

タヒチ島に赤いシャツを着て，仕事に精を出している婦人がいました。彼女の背中は曲がり，片方の目は見えませんでしたが，指だけは，目にもとまらぬ早さで，たこの木から作ったひごを織って，カゴや帽子，下に敷くマットを作ってい

マーシャル博士は1955～58年　タヒチに伝道をし，その後妻のジェーンと共に勉学のためにアメリカに戻った。コネチカット大学で博士課程を修了後，西部アメリカに住居を構えようと計画している。二人はハートフォードステーキ部，マンチエスターワード部に属している。

ました。

この仕事は彼女にとっていまに始まった仕事ではありませんでした。八十歳にもかかわらず，彼女の手はアミのような材料にすっかりなじんでいて彼女は巧みにこれをひねったり曲げたり押えこんだりしてこま物を編んでいました。彼女にはある目的がありましたので，片時も手を動かすのをやめませんでした。その目的というのは，三度目のニュージーランド神殿訪問に参加しエンダウメント，結び固め，バプテスマを受けることでした。彼女はこの目的が果たせる日を首を長くして待ち望んでいました。

何年もの間，これはテリオテマナにとってかなうかかなわないかわからない夢のような話でした。彼女は竹で造った小屋のすみに座って，遠いマオリ人の国，主の神殿があるニュージーランドへ行く費用を作るためにこま物を織ってこつこつとお金をためていました。彼女が朝早くからたそがれどきまで編み続けている間，夫のプナも二人の計画を果たそうと励んでいました。彼はいつかこれらの野菜を売って預金の足しにしようとキャベツやトマトそれにタマネギのうえてある畑を耕したり草を取ったりしていました。

それから数年が経ち，こま物織りと野菜作りは相変らず続きました。それでわずかずつでしたけれどお金はたまっていきました。世界中の人々がプレゼントの包みを開き，マントルピースからくつ下をおろすクリスマスの日，テリオテマナとプナはニュージーランド神殿の急な階段を厳かな気持で踏みしめていました。二人は夢心地で，耳慣れない言葉で話しているテンプルワーカーの楽しそうな声も耳にはいらず，クリスマスの日に夢かなってニュージーランド神殿に到着し，その神殿の中を通りぬけているというううれしさのあまり，ささやきあっているタヒチの聖徒たちのささやき声さえ耳にはいらぬように歩いていました。

これは1963年のことでした。初めて神殿を訪問したこのタヒチの聖徒たちは15日間，毎朝6.時に神殿へ行き，多くのセッションが終わって，神殿が閉じられる真夜中まで神殿にいました。

タヒチの聖徒たちがついに機上の人となって，タヒチまでの2300マイルの帰途に着いた時，これで夢は果たされました。しかし，テリオテマナにとって，これからが始まりでした。座席に頭をもたせかけ目をとじて，彼女は神殿で聞いたことばをしっかりと心にきざみこもうと，少しずつ神殿で経験したことをあれこれと思い起こし始めました。タブアイにある彼女のもろい竹小屋に戻って来てからも，眠れない夜はこの神殿での経験を思い出していました。パピエテの新空港で飛行機を降り，他のタヒチの聖徒たちに別れを告げて，夫と共に自分の島へ帰るために7日間の船旅の準備をしました。この時彼女は帰ったら再び，こまもの編みを始めなければならない，今度は前よりもっと本気になって編もうと思いました。

「来年もまた，私たちと一緒にいらっしやるでしょう？」とトーマス・R・ストーン部長は飛行機から降りる彼女に手をかしながらたずねました。「来年」「来年」「来年」この言葉が彼女の心の中に波紋のように広がっていき，不可能なことであるという懸念が浮んで消えました。何年もかかってやっと果たし得たことをたった一年やそこらでどうやってもう一度神殿に行くことができるでしょうか。彼女には健康の問題がありました。それよりも命があるかどうか。「もし主が私に力を与えて下さり，生きながらえさせて下されば…」と彼女は言いました。「大丈夫，きっとできますよ。」部長は答えました。伝道部長と約束した言葉と神と誓約した言葉が次の18か月間というもの，たえず心の中にこだましていました。

1965年7月に再び，タヒチの聖徒たちはニュージーランドに向けて出発することになりました。これに再び参加しようと，テリオテマナは織物を織りに，夫のプナは耕作に戻りました。収穫は毎年減少し，プナのからだはだんだん弱っていきました。二人はブタを売り払い，70代もなかばを向かえたプナでもできるような職を見つけるためにパペーテに移りました。プナはついに波止場で仕事を見つけました。その仕事は安い賃金でしたが，静かにやれる仕事でした。

一方，テリオテマナの手は相変らず，たこの木のひごによりを掛けたり，穴をかがったりして帽子やかごや敷物を編み上げていました。神殿訪問の時期がだんだん近づき，タヒチ聖徒の第二回神殿訪問計画も詳細なことまで決められました。しかし，彼女の手は，なおもこま物を編み続けていました。神殿を訪問する費用になる程，お金はたまっていなかったからです。宣教師たちは彼女に寄付をしました。いまや，テリオテマナのゴツゴツとふしくれだった手はひごを編み上げて，これを売ったお金を宣教師たちに返すなどとてもできそうにありませんでした。しかし，飛行機が予定通り出発した時，プナとテリオテマナの二人も機上の人となっていました。

「もし主が私に力を与えて下さり，生きながらえさせて下されば」目的地に向かって飛ぶ飛行機の中で，この言葉はテリオテマナの心を何度も捕えて離さなかったにちがいありません。彼女は生きながらえてニュージーランドへ行く途中でしたけれど，自分の片方の目がもう何も見えなくなったことや腰がじわじわと曲っていく痛さやとりわけ，パペーテの医者に通ってX線の治療を受けたことなど，だれにも話したくないと思っていました。

神殿にはいるとなつかしさがこみ上げてきました。前に来たときと同じようにホールや階段までも彼女の訪問を歓迎してくれているようでした。しかし今回は以前よりも各部屋が暗くぼんやりとしか見えず，脚も前よりずっと弱っていました。テリオテマナは病いに倒れました。至急電報がうたれて彼女が危篤状態に陥っており，手術するために伝道部長の承諾が必要であるということがストーン部長に知らされました。ストーン部長は，即刻テリオテマナに手術を受けさせ，彼女に灌油の儀式を施し，タヒチの聖徒たちは全員断食と祈りを始めるようにと折り返し電報で指示してきました。

それから二日間，テリオテマナは病室や包帯それにタヒチ語こそ話していませんでしたが，白い服を着た看護婦さんがシーツのしわをのばしたり，ほほえんでいるのがかすかに見えました。それから，タヒチの聖徒たちの監督をしているマーロン・K・アシュトン長老はベッドの側に座り彼女の手をやさしくなでて，この二日間に起こった奇跡的な出来事を話しました。手術は成功したのでした。彼女自身の信仰と共に，彼女の愛するタヒチの聖徒たちが行なった断食と強い信仰と心からの祈りが奇跡を起こしたのです。

その日から19日間で彼女はタヒチの聖徒たちのところへ帰れるほど丈夫になりました。それで，彼女はニュージーランドでの最後の一日をみんなと共に過して，予定通り聖徒たちと共にタヒチに帰りました。

また年月が過ぎ去り，テリオテマナはまた別の重い病気にみまわれましたが神権の力と信仰の力によっていやされました。彼女はもうあの丘の上に建てられた神殿がある遠い島へと旅をすることはできないかもしれませんが，交した誓約と受けた約束それにニュージーランドで経験した奇跡のことを深い感謝の念をもって思い出しています。

神がテリオテマナに力を与えて下さり，生きながらえさせて下さっているあいだ，彼女の指はりっぱなたこの木ひごでこま物をせっせと編み続けることでしょう。

忘れられない誕生日

テンプルスクウェアーの守衛をしている兄弟が次のような話をしてくれた。

「最近のことですが，ある朝，私は神殿の門の所で机に向かって本を読んでいますと，ドアをノックする音が聞こえました。外をのぞくと，7，8歳位の子供が二人立っていました。その子供はきちんと服を着ておらず，顔も洗っていない様子で，それに髪もくしゃくしゃでした。お父さんやお母さんが起きる前に家を出てきたようでした。子供の後を見ますと，二台のうば車に赤ん坊がのせられていました。どんな用か尋ねますと，一人がうば車の弟を指さして，こう答えました。

『あの子はジョーというんです。ジョーと握手してくれませんか。今日はジョーの誕生日で，二歳になるんですよ。ジョーが大人になった時二歳になった日に神殿をさわったことを思い出すように，神殿をさわらせてあげたいんです。』

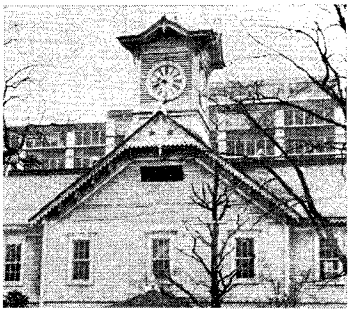
もう一人の赤ん坊を指さして，『この子はマークというんです。マークも二歳です。』と言い，小さな子供に似合わず敬虔な態度でこう頼みました。『中へ入って神殿にさわってもいいですか』『もちろんだとも』と私は答えました。二人はうば車を押して中へ入り，赤ん坊を抱き上げると，その手を聖い建物にくっつけました。私は胸がつまされるような思いで，そこに立っていました。すると，少年が弟に向かってこう言うのが聞こえました。『さあ，ジョー，これでお前が2歳の時に神殿をさわったことをきっと忘れないね』二人は私にお礼を言うと，家へ帰って行きました。

ハロルド・B・リー第一副管長
1957年4月大会

日本東伝道部

〈友よ大地に明日を築こう〉

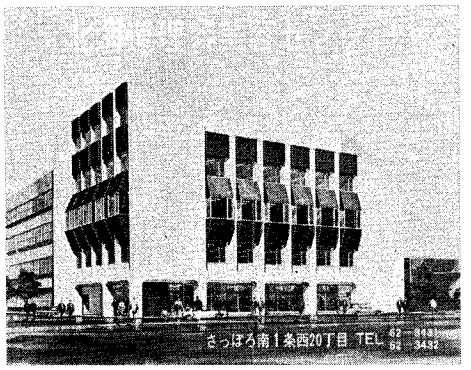
——迫りくるユースコンファレンス——



日本東伝道部初のユースコンファレンスは，盛夏の８月，北海道札幌市で開かれます。既に参加申込も続々本部に到着しています。プログラムも決まり，いよいよ大会当日を待つのみとなりました。

８月６日（金）は，札幌市立体育館で，９時から開会式，引続いてスポーツ大会が開かれます。バレーボールの決勝戦の外，インスタントチームの試合，小さい子供の運動会と，家族全員が参加できるプログラムが用意されています。

夜の演劇祭は，札幌支部ＭＩＡホールで，東北が「さっぱ夜ばなし」，北海道が「夕づる」を上演します。



７日（土）は朝８時から10時までゼミナール。５つの分科会に別れて，膝つき合わせて大いに討議してもらいます。

10時半から５時半までは，思う存分北海道の自然に親しんでいただく，楽しいハイキングなどのコースが幾つも用意されています。

夜の６時から９時までは，ダンスパーティーで，過ぎゆく札幌の夏の夜を惜しんで下さい。

８日（日）は朝９時から12時まで，札幌支部の会堂で証詞会です。

北海道で行なわれる初のモルモンの若者の祭典は，美しい自然，気候風土と相まって，きっと参加した若者たちに素晴しい感銘をもたらすことでしょう。

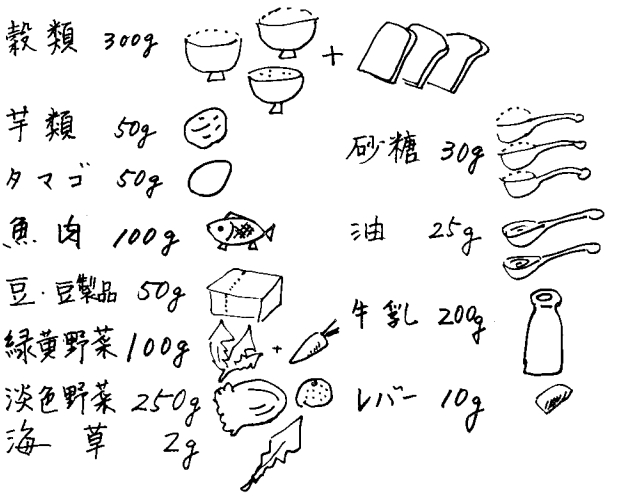
＜扶助協会のホーム•メーキング活動＞

ロスアンゼルス大地震の例をひくまでもなく，私たちモルモンにとっては，常に食糧の貯蔵と保存の必要性が強調され，奨励されてきました。果物ジャム・缶詰・砂糖・小麦粉・米など必要なあらゆる物が貯蔵され，保存されなければなりません。

私たちも少しずつ学び，また実際に保存食などを作ることによって，その必要性を自らのものにしてゆきたいと思います。

旭川支部の扶助協会では，先ず最初に，一体どの位のものを貯蔵したらよいか，という疑問から出発し，一日の必要食品と量を出して見ました（図参照）。これで一週間分，一か月分の買い物と貯蔵の目安がついてきましたが，同時にこういった勉強の中で，毎日の献立の中で必要な食品が欠けているのに気付く，といったこともありました。これは貯蔵ということの大切な副産物に違いありません。例えば，私たちは朝食をもっと大切にして，タマゴ１個，いも

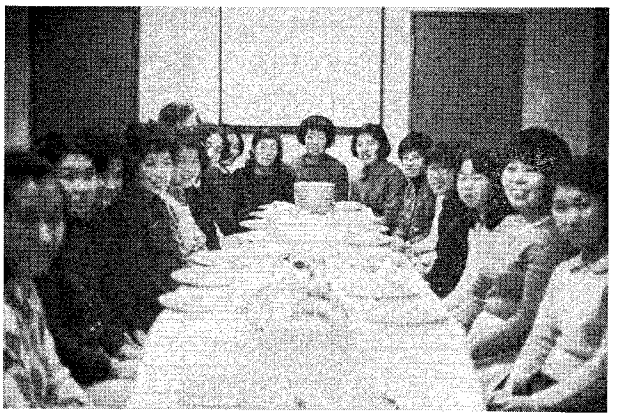
一日の必要量（成人女）



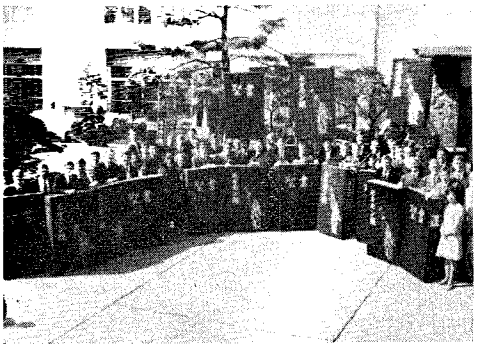
50ｇ，レバー10ｇと野菜を少しなど，ぜひとりたいと思います。

ホーム・メーキングの活動は，続いて，(1) びん詰の消毒と殺菌法つめ方。保存食の実習。(2) いちごジャム，みかんママレード，マヨネーズソース，ソースのいろいろ。(3) トマトを使って，ジュース，ピューレ，自家製パンの作り方，いも料理，豆料理。(4) 貯蔵のまとめ，安くて栄養のある献立の実習，などへと進みました。

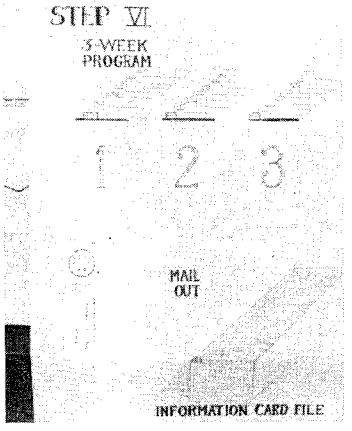
自家製パンなども大変好評で，早速あちこちの家庭で試みられています。会社の同僚の結婚式に，五段のウェディングケーキを女子社員みんなと共に作ってあげて喜ばれたなど，実地に応用された例もあります。今製造元からビンをとり寄せて，沢山ビン詰を作り，販売しようかなどと計画しています。



この日から…はや三年…



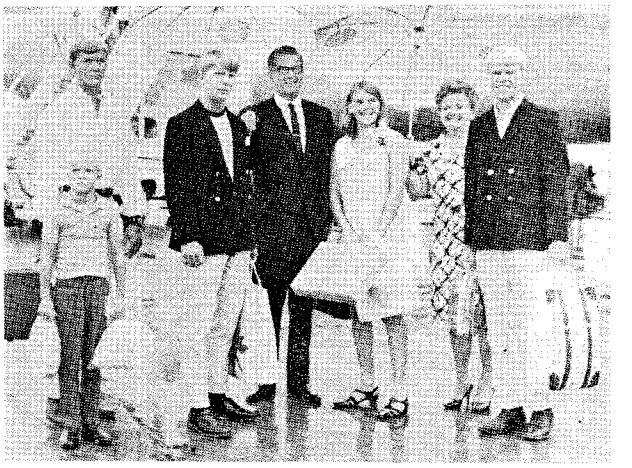
（各地のホテルへモルモン経配布）



（万博リフェロー３週間プログラム）

（クリスマスモルモン経と家庭の夕べ
配布プログラム）

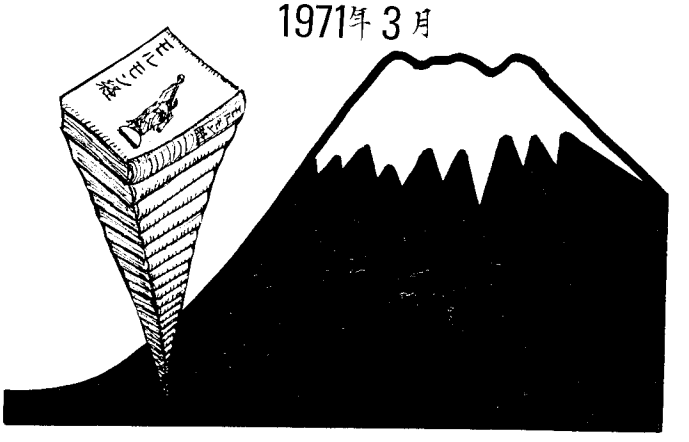
（モルモン経プログラム）



"Thank you very much, Daddy" "Thank you very much, Mammy." 涙ながらに語られた１姉妹のこの言葉に一瞬会場は静まりかえり，次の瞬間にはおさえきれず堰を切ったようにあちこちでおこった嗚咽，流れでる涙。浜松で開かれた地方部大会後のささやかなレセプションでのこの光景は愛と感謝と別れの悲しみを私たち１人１人の胸にあらたにこみあげさせました。

本当にありがとうございました，私たちのお父さん，そしてお母さん。

この三年間，私たちにもたらされた数々の祝福，どの１つをとってみても，日本を愛し，日本の人々を愛し，私たちのために働いて下さったビルス伝道部長さんなくては，神様の御手もこんなにまでこの地になかったのではと思える程です。沢山の日本から召された宣教師たち，次々とチャレンジされたすばらしい数々のプログラム，それらを通して非常に多くの方々が福音を知り，バプテスマをお受けになりました。そして日本の地にこんなにはやくステーキ部が生まれ，私たちにとって夢であったソルトレーク神殿，総大会訪問も実現して下さり，今又あらたに，大管長会許可のもとに大きな系図の仕事が日本ではじめられようとしており……数々の忘れ得ぬ思い出とともにビルス伝道部長御夫妻の愛と行ないで蒔かれた種を大きく育くみ実りをより豊かにし，お父さんお母さんへのお返しをできるよう，また，新らしい伝道部長とともにがんばろうという静かな決意と感謝と別れの悲しみが交叉する今日今頃なのです。

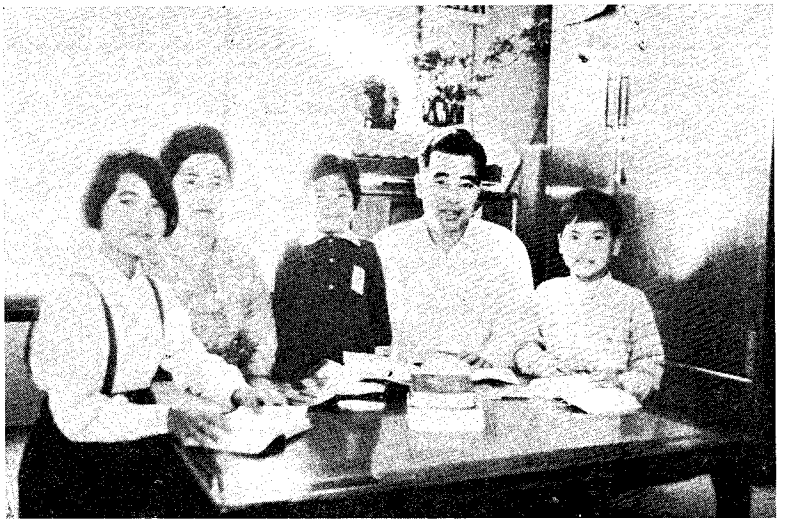


（富士の高さをこえたモルモン経配布数）

日本西部伝道部

私の改宗

牧　啓也



1970年は私の生涯において最も記念すべき年となるに違いない。なぜならこの年に私は長らく探し続けてきたもの，この世と人間のあるがままの姿，すなわち「人生の真理」に遭遇することができた。これは実にすばらしいことであった。私がこの世に生まれてきた意味は何か，私の幸福はどこにあるのか生存の目的が何であって私は何をすればよいのか，といった人生の根本問題についてはっきりとした回答が得られたからである。

「四十にして惑わず」という。思うにこれまでのわが半生は，ただ自らがよって立つべきこの真理を見出さんがための一道程に過ぎなかった。すべての失敗とその後悔も，多くの人間的努力とその挫折も，重なる快楽追求とその苦杯の数々も，この真理を得んがための試錬であったのだ，と思わざるを得ない。そしていまや私は死の不安におののくこともなく，光を求めてさまようこともない。ひたすらにこの道をまっすぐに歩んで行けばよいのである。

七月の初めに万国博を見る機会に恵まれ……この館の出口で買い求めた「モルモン経」，読み始めるや否や私は大きな感動に打たれた。何とすばらしい民族の一大記録であろうか。アメリカ大陸の先住民の歴史に語られた神のみことばとその遠大な計画の啓示。一読して私はこれまでの宗教上の諸疑問が氷解する思いであった。余人は知らず私は，この経典をすぐに「ホンモノだ」と信じた。自らの中にある多分に信じ易い性癖を容認しつつも，「モルモン経は，まったく神からのものである」という私の確信を公言してはばからない。その後この教えについて学べば学ぶほどその確信は深まるばかりである。

高校時代に自分の力の限界を知り，やがて自分の存在そのものに疑問を感じ，度重なる焦燥感に襲われた。世界を変革する運動には真の生きがいがあるかも知れないと期待してのぞいてみた。いろんな宗教の門を叩いてみた。いずれも駄目だった。私にはとてもついてゆけないと思えたのである。

学業を終えて職を得，結婚して子供ができ，という普通の社会生活を営む年数が多く経過するにつれて，私は自分の思い上がりを悟るようになった。私はいまあるところの者でしかないのだし，それ以上でも以下でもないのだと考えるにいたった。

依然として「世の中の役に立つ人間になりたい」とは考えていたし，多くの人が幸福になるについて，何か私なりの手助けができたらと心の中に望んでいた。しかし実際には，実のある行動は何もしていないし，職場の中でもからっきし実力のない自分を認めないわけにはいかなかった。

また，心の中にもいろいろの欲望が汚なくうず巻いている私であること，そしてその欲望たるや年とともに醜悪化し，巨大化していくように思われて仕方がなかった。然り，私は全くもって，心底下等でかつ下劣きわまりない人間なのである。よし，それならそれで「下根の凡夫」に徹底して生きたらどうか，と考えるにいたった。

……「いったい，こういうことをくり返して何になるというのだ。人も自らをも傷つけて残るのは良心のかしゃくのみ。ああ，この頭の割れるような痛みと，全身の虚脱感と，そして胸の中のドス黒い苦渋の固まりから脱れ出ることさえできるならば……」とただ声をのんで泣くことしかできなかった。

現在，私は不完全きわまりないし多くの悪い要素，知恵に欠けるところ，弱点，他人に冷たいところを持っている。従ってこのままの私であってよいはずがない。私は隣人愛の行ないに富み，知恵にまさり，善に強くなければならない。えこひいきをせず，自分を愛するように他人を愛することができる者とならなければならない。そして今私はこのモルモンの教えにつき従う限りどこまでも進歩していって，ついにはキリストの高さにのぼり，神の子とされる約束を得ている。

さらにすばらしい約束を私は得ている。すなわち，私は私の努力によって父を始めとする父祖たちの霊に，幸福への道をもたらすことができる。肉体をもって今生きている私が父祖の救い手として彼等の幸福に奉仕することができることを知っている。何とこれは大きな希望ではないか。

私はこの福音に立って実験してみた。神の戒めを守って歩いてみた。そして，このイエス・キリストの福音の真理が私の中でよい実を結びつつあることをはっきり体験している。私によいものであったからきっと他の人々にとってもよいものであるに違いない。私は自らの実験が成功し，今後ますます成功すると確信しているので，だれに向かっても「どうぞ，ひとつ試してみませんか」と自信をもって勧めることができるし，またそうしなければならないと思っている。

注：筆者は奄美大島の県庁支所に勤務し，本年三月に大神権を受けた。現在奄美大島には二人の宣教師が送られ，島民より多大の歓迎を受けている。

愛と励ましに

内田美雪

皆様の暖い愛と励ましにより，私はソルトレーク市の初等協会小児病院で第一回目の手術を受けることができました。YWMIA会長のジャコブセン姉妹や，多くの兄弟姉妹が私を助けて下さっています。手術は大成功だったのです。もう今すぐにでも日本へ帰りたい気持ですが，この成功で，その日も間近であると思います。私はこの経験を通して，現在私があるのは福音が真実だからであるとはっきりわかりました。そしてその福音のもとに一つとなった兄弟姉妹の一員であることを誇りに思い，感謝しています。また皆様の愛と助けを心から感謝しています。間もなくお会いできる日を楽しみにしています。

日本中央伝道部

日本中央伝道部新伝道部長の御紹介

写真向って左よりテイモシー(6), トム・清水部長, スコット(4), 順子姉妹

清水伝道部長メッセージ

18年前，日本の地に，私の第一歩をしるした時に，私の夢はかなえられました。父の農園で働いていた少年の頃からの，私の願いは，いつの日か，私の先祖の育った地を見ることでした。その願いは，とても強く，こうした機会を得て，三度，この日本の地に参りました。私は，天父なる神に奉仕するこの召しに，心から感謝しております。

この教会の会員として，私共が持っている使命は，救いと昇栄の教えを，宣べ伝えることであり，この地上で，私達がしなければならない大切な業はこの他に何一つありません。

そして日本の国民に，イエス・キリストの福音以上に，大きな祝福をもたらすものは，この地上に何もありません。

天父なる神が望まれる処まで，日本の国を高めるよう，私達のすべての力，体力，勇気とをもって，共に働こうと今決意しましょう。私は天父なる神と，この教会とを愛しております。私は，神が生きておられることを知っており，あなたがたと，私の先祖の地に住む神の子等と，天父なる神に奉仕する為に，私の生命を捧げております。

終りに，私は，私達のこの世の生活の本当の目的を達成する為に，共に働けるように，お祈りしております。イエス・キリストの御名により，アーメン。

清水　勝

岡崎幸雄伝道部長解任に当り，新らしく伝道部長としてM・トム・清水部長が任命されました。新伝道部長着任に先立って御家族を紹介いたします。

M・トム・清水部長はカリフォルニヤの西ロスアンゼルスにて生まれ，ユタ大学を卒業しました。1964年10月10日にロスアンゼルス神殿で出原順子姉妹と御結婚され，カリフォルニヤのエル・セグンドの建設部長をしています。清水部長は日本で宣教師として働いた経験があり，その他に三つの違ったステーキ部で二つの七十人定員会会長として奉仕されたり，バトラーワード部の書記としても働きました。

清水姉妹は愛知県で生まれ名古屋でバプテスマを受けました。また日本で専任宣教師として奉仕され，日曜学校，ＭＩＡの色々の責任を持って働かれた経験があります。杉山女学校を卒業され米国のU．C．L．A．の芸術部に入学されました。なお清水部長には今年５月８日に生まれたマーク・マサヒデ清水君の他，４才のスコット君，６才のテイモシー君の三人のお子様がいらっしゃいます。

M．I．A．コンファレンスに参加しよう!!

日本中央伝道部では第三回目の M．I．A．コンファレンスを下記の如く盛大に行なう予定です。新らしい会員は言うに及ばず求道者の皆様をさそって一人でも多くの人々がこの意義ある素晴らしいコンファレンスに御参加下さい。

特に若い人々の参加を期待致しております。なお参加資格は14才以上100才までの人々であれば誰でも結構です。

1．場　所：神戸カナディアン・アカデミー	5．８月12日（木）オリエンテーション，開会式，盆踊りの夕べ
2．日　時：８月12日（木）～８月15日（日）	6．８月13日（金）音楽祭，討論会，ロードショー
3．参加資格：14才～100才迄，男，女，会員，非会員を問わない	7．８月14日（土）スポーツ，ダンスの夕べ，ファイヤーストーム
4．参加費用：4,500円（保険，宿泊食事込み）	8．８月15日（日）神権会，姉妹の集い，証会

日本中央伝道部役員サヨナラワークショップ

日本中央伝道部の補助組織役員並びに神権役員が去る５月29日～30日にかけて集まり，岡崎伝道部長夫妻最後のトレイニングを受けました。

５月29日（土）お別れの晩餐会とフェローシップの夕べ

５月30日（日）ワークショップ及び証会

３年間，精力的に働かれ偉大なリーダーシップを発揮されて伝道部役員を導びかれ指導されました岡崎部長御夫妻に深く感謝致します。帰国後の部長と御家族の増々御活躍と主の祝福を心よりお祈り致します。

←

聖 徒 の 道　昭和42年12月18日第3種郵便物認可
1971年7月20日発行（毎月1回20日発行）[illegible]

聖徒の道
1971年7月20日発行
発行人兼編集人 [illegible] R. ヒルス
発行所 [illegible] − 8 − 10
[illegible] 電話 (442)7459
印刷所 [illegible]
定 価 [illegible]
[illegible] 1,000円 （海外4ドル50セント）